

盛岡市内遺跡群

—令和元年度発掘調査報告書—

大新町遺跡	第85次
西鹿渡遺跡	第37次
二又遺跡	第15次
安倍館遺跡	第94次

2022.1

盛岡市教育委員会

盛岡市内遺跡群

—令和元年度発掘調査報告書—

大新町遺跡	第85次
西鹿渡遺跡	第37次
二又遺跡	第15次
安倍館遺跡	第94次

2022.1

盛岡市教育委員会

序 言

盛岡市は、北上平野を縦断する北上川と、その東西に位置する奥羽山脈と北上山地から流れ出る雫石川・中津川との合流点に位置し、雄大な岩手山や姫神山を望む約30万人の人口を抱える岩手県の県都です。北東北の拠点都市として緑豊かな環境と高度都市機能の調和したまちづくりを目指しています。

市内には、旧石器時代から江戸時代まで、およそ780箇所の遺跡が存在します。その中には、国・県・市指定の史跡として保存・活用が図られているものもありますが、各種開発等によって姿を変え、消滅していく遺跡があることも事実であります。

盛岡市では、文化財保護の立場から、国の補助を受け市内各地の個人住宅建築に伴う調査を継続的に実施しており、当市の歴史を紐解くうえで、大変貴重な成果をあげております。

本書は、令和元年度に実施した市内遺跡群の発掘調査報告書であります。市民の皆様への地域理解の一助として、また学術的な研究資料として広く活用いただけましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大なる御指導や御助言を賜りました文化庁文化財第二課、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課、発掘調査に御理解と御協力を頂いた地権者各位及び地元関係者の皆様に厚く御礼申しあげます。

令和4年1月

盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一

例 言

- 1 本書は、令和元年度国庫補助事業「盛岡市内遺跡群」の発掘調査報告書である。
- 2 本書は遺構及び遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集執筆を鈴木俊輝、執筆を津嶋知弘、今野公顕、室野秀文が担当し、菊地幸裕、花井正香、今松佑太、杉山一樹、佐々木あゆみ、浜谷佑が協力した。
- 3 遺構の平面位置については、大新町遺跡は世界測地系、西鹿波遺跡・二又遺跡・安倍館遺跡は日本測地系を用い、平面直角座標系X系を座標変換した調査座標で表示した。なお、方位は座標北を表している。
大新町遺跡 調査座標原点 X - 31,200,000 m Y + 23,900,000 m = R X ± 0,000 R Y ± 0,000
西鹿波遺跡 調査座標原点 X - 37,400,000 m Y + 28,600,000 m = R X ± 0,000 R Y ± 0,000
二又遺跡 調査座標原点 X - 36,000,000 m Y + 24,000,000 m = R X ± 0,000 R Y ± 0,000
安倍館遺跡 調査座標原点 X - 31,200,000 m Y + 23,900,000 m = R X ± 0,000 R Y ± 0,000
- 4 高さは標高値をそのまま使用している。
- 5 土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（2013 小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業㈱発行）を参考にした。
- 6 遺構の名称及び記号は次のとおりである。また「竪穴建物跡」の名称については、『発掘調査のてびき - 集落遺跡発掘編 -』（2010 文化庁文化財部記念物課・独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編集）に倣っている。

大新町遺跡・西鹿波遺跡・二又遺跡				安倍館遺跡	
遺 構	記 号	遺 構	記 号	遺 構	記 号
竪穴建物跡	RA	土 坑	RD	堀・溝跡	SD

- 7 二又遺跡の遺構番号は、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査遺構番号との整合を図り、3桁の遺跡内連続番号とした。
- 8 本書中の地図は、国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1「盛岡」「小岩井農場」「矢幅」「南昌山」の地形図を使用し、5万分の1、10万分の1に縮小・編集したものを掲載している。
- 9 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は、盛岡市遺跡の学び館で保管してある。
- 10 本調査の一部については発掘調査成果報告会や速報展等で報告・発表しているものがあるが、本書の記載内容をもって訂正する。

11 調査体制 —令和元年度～令和3年度—

〔調査主体〕 盛岡市教育委員会

教育長 千葉 仁一
 教育部長 豊岡 勝敏（～R2年度） 岡市 和敏（R3年度～）
 教育次長 大澤 浩（～R2年度） 川原 善弘（R3年度～）

〔調査総括〕 歴史文化課 遺跡の学び館

課長兼館長 福田 淳（～R2年度） 割船 活彦（R3年度～）
 館長補佐 三浦 志麻（～R2年度） 大森 勉（R3年度～）

〔調査〕

文化財副主幹 室野 秀文（～R2年度）※調査（西鹿渡遺跡）
 文化財副主幹 菊地 幸裕
 文化財主査 津嶋 知弘 ※調査・整理（安倍館遺跡）
 文化財主査 神原雄一郎（R3年度～）
 文化財主査 今野 公顕 ※調査・整理（大新町遺跡・二又遺跡）
 文化財主査 花井 正香
 文化財主査 佐々木亮二（～R1年度）
 文化財主任 似内 啓邦（R2年度）
 文化財主事 鈴木 俊輝 ※調査・整理（大新町遺跡）
 文化財主事 今松 佑太（R3年度～）
 文化財主事 杉山 一樹（R3年度～）
 文化財調査員 今松 佑太（～R2年度）
 文化財調査員 室野 秀文（R3年度～）※整理（西鹿渡遺跡）
 文化財調査員 佐々木あゆみ
 文化財調査員 鈴木 郁美（R2年度）
 文化財調査員 浜谷 佑（R3年度～）

〔管理・学芸〕

主任 菊池 好文（R1年度） 杉浦 雄治（R2年度～）
 文化財調査員 金 俊教（R1年度） 伊藤 聡子（R2年度～）
 学芸調査員 千葉 貴子
 学芸調査員 樋下 理沙（R2年度～）

〔発掘調査・室内整理作業〕

阿部真紀子、天沼芳子、及川亜矢子、及川京子、折原エツ子、川村久美子、菊地泰乃、熊谷あさ子、齋藤義文、佐々木富士子、佐藤美智子、佐野光代、高橋弘子、千葉ふさ子、袴田英治、樋口泰子、細田幸美、武蔵真由美、村上幸子、村上美香、山田聖子

〔地権者・助言・調査協力〕

細沼和輝、船越亘、浅沼大貴、山本和男、西野修、岩手県教育委員会

《遺物の表現について》

(1) 土器

- a 土器の区分は、縄文土器、須恵器、あかやき土器、土師器に大別した。
- b 縄文時代早期に属する土器の実測図・拓本の縮小率は1/2とし、その他は1/3とした。
- c 挿図の配列については、器種・器形・出土層位・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。
- d 稜線・沈線は実線・破線で表現し、陰影は表現していない。

(2) 石器

- a 剥片石器の縮小率は2/3とした。
- b 石器の展開順序は、基本的に左側に表面（背面）、中央に右側面、右側に裏面（腹面）を配列し、必要に応じて縦断面・横断面を付け加えた。
- c 挿図の配列については、器種ごとにまとめ、層位順に配列した。
- d 自然面はドットで表現した。

(3) 土製品、石製品、鉄製品

- a いずれも縮小率を2/3とした。

(4) 挿図中の記号・番号は遺物の出土位置及び出土層位を表している。

(例) RA 369 B層 → RA 369 竪穴建物跡内埋土B層より出土

(例) G 9 - B 21 VI層

↓ ↓ ↓
※1 ※2 ※3

- ※1 調査座標原点RX±0 RY±0を起点として、X・Y両軸を50mごとに区切る大グリッドを設定し、X軸線上を西から東へA・B・C…W・X・Y（東から西へ場合は-A・-B・-C…-W・-X・-Y）、Y軸線上を北から南へ1・2・3…23・24・25（南から北へ場合は-1・-2・-3…-23・-24・-25）と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組み合わせを、大グリッドと呼称した。
- ※2 大グリッドを2mごとに細分割し、小グリッドを設定し大グリッドの呼称を再び用いた。よって大グリッド-小グリッドという組み合わせで、遺物の平面出土地点を2mごとに表示した。
- ※3 遺物の出土層位を表している。

《遺構の表現について》

遺構の挿図中、説明する当該遺構については実線で表現した。また、説明遺構と切り合った遺構については一点鎖線、オーバーハング及び推定線は破線で表現した。

目 次

序 言	
例 言	
目 次	
表 目 次	
挿 図 目 次	
写 真 図 版 目 次	

I 令和元年度発掘調査の概要	1
II 大新町遺跡（第85次調査）	5
III 西鹿渡遺跡（第37次調査）	19
IV 二又遺跡（第15次調査）	37
V 安倍館遺跡（第94次調査）	47

写 真 図 版	
附 章	

大新町遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）および炭素・窒素安定同位体分析	65
報告書抄録	

表 目 次

第1表 令和元年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧	1
第2表 大館町遺跡・大新町遺跡調査一覧	8
第3表 西鹿渡遺跡調査一覧	20
第4表 RA060竪穴建物跡埋土観察表（1）	23
第5表 RA060竪穴建物跡埋土観察表（2）	24
第6表 二又遺跡調査一覧	39
第7表 RA028竪穴建物跡埋土観察表（1）	45
第8表 RA028竪穴建物跡埋土観察表（2）	46
第9表 RA028竪穴建物跡出土土器観察表	46
第10表 安倍館遺跡調査一覧（平成11年度以降）	48
第11表 SD300堀跡埋土観察表	52

挿 図 目 次

第1図	地形分類と周辺の遺跡分布	2
第2図	大新町遺跡の位置 (1:50,000)	5
第3図	大館町遺跡・大新町遺跡全体図	9・10
第4図	大新町遺跡第85次調査全体図	11
第5図	調査区土層断面図	12
第6図	R D6662土坑、ピット	14
第7図	遺物包含層出土遺物	16
第8図	大新町遺跡出土押型文土器文様模式図	18
第9図	西鹿渡遺跡の位置 (1:50,000)	19
第10図	西鹿渡遺跡全体図	21
第11図	西鹿渡遺跡第37次調査全体図	22
第12図	R A060竪穴建物跡平面図 (1)	25
第13図	R A060竪穴建物跡平面図 (2)・土層断面図 (1)	26
第14図	R A060竪穴建物跡土層断面図 (2)	27
第15図	R A060竪穴建物跡出土土器 (1)	29
第16図	R A060竪穴建物跡出土土器 (2)	30
第17図	R A060竪穴建物跡出土土器 (3)	31
第18図	R A060竪穴建物跡出土土器 (4)	32
第19図	R A060竪穴建物跡出土石器・土製品・石製品・鉄製品	33
第20図	R D040~045土坑・柱穴・柱穴状ピット	34
第21図	二又遺跡の位置 (1:100,000)	37
第22図	二又遺跡全体図	40
第23図	二又遺跡第15次調査全体図	41
第24図	R A028竪穴建物跡	43
第25図	R A028竪穴建物跡出土遺物	44
第26図	安倍館遺跡の位置 (1:50,000)	47
第27図	安倍館遺跡全体図	49
第28図	安倍館遺跡第94調査全体図	51
第29図	調査区北壁断面図	52

写真図版

- 第1図版 大新町遺跡第85次調査区全景、調査区北東部分全景、RD6662土坑全景、調査区東壁基本層序、Vb層スコリア粒検出状況土層断面
- 第2図版 Vc層押型文土器出土状況、Vb層沈線文土器出土状況、調査区全景（遺物包含層精査前）、遺物包含層出土石器、遺物包含層出土土器
- 第3図版 西鹿渡遺跡第37次調査区全景、RA060竪穴建物跡全景
- 第4図版 RA060竪穴建物跡土層断面、カマド（新）全景、RA060竪穴建物跡北東部遺物出土状況、RA060竪穴建物跡土器・紡錘車出土状況、RA060竪穴建物跡出土遺物
- 第5図版 RA060竪穴建物跡出土土器、RA060竪穴建物跡出土高坏
- 第6図版 二又遺跡第15次調査区全景、RA028竪穴建物跡全景
- 第7図版 カマド（新）精査状況、調査風景、あかやき土器灯明皿出土状況、あかやき土器灯明皿、RA028竪穴建物跡出土遺物（須恵器坏、あかやき土器坏、あかやき土器坏）、RA028竪穴建物跡出土遺物（須恵器甕、土師器甕、土師器甕）
- 第8図版 安倍館遺跡第94次調査区全景、SD300堀跡全景、調査風景

I 令和元年度発掘調査の概要

1 令和元年度事業の概要

発掘調査 令和元年度は、発掘調査・試掘調査をあわせて28件実施した(学術調査・現状変更除く)。このうち国庫補助事業(盛岡市内遺跡群発掘調査事業)で実施した発掘調査は本調査4件である(第1表)。

遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査原因
安倍館遺跡(第94次)	盛岡市安倍館町124-5	19.04.15～04.26	65㎡	個人住宅建築
大新町遺跡(第85次)	盛岡市大新町17番18	19.04.15～06.05	86.6㎡	個人住宅建築
西鹿渡遺跡(第37次)	盛岡市三本柳2地割37-9	19.05.31～07.02	66.2㎡	個人住宅建築
二又遺跡(第15次)	盛岡市下飯岡1地割51-1	19.09.17～09.30	36.4㎡	個人住宅建築

第1表 令和元年度 盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

2 盛岡の地形・地質

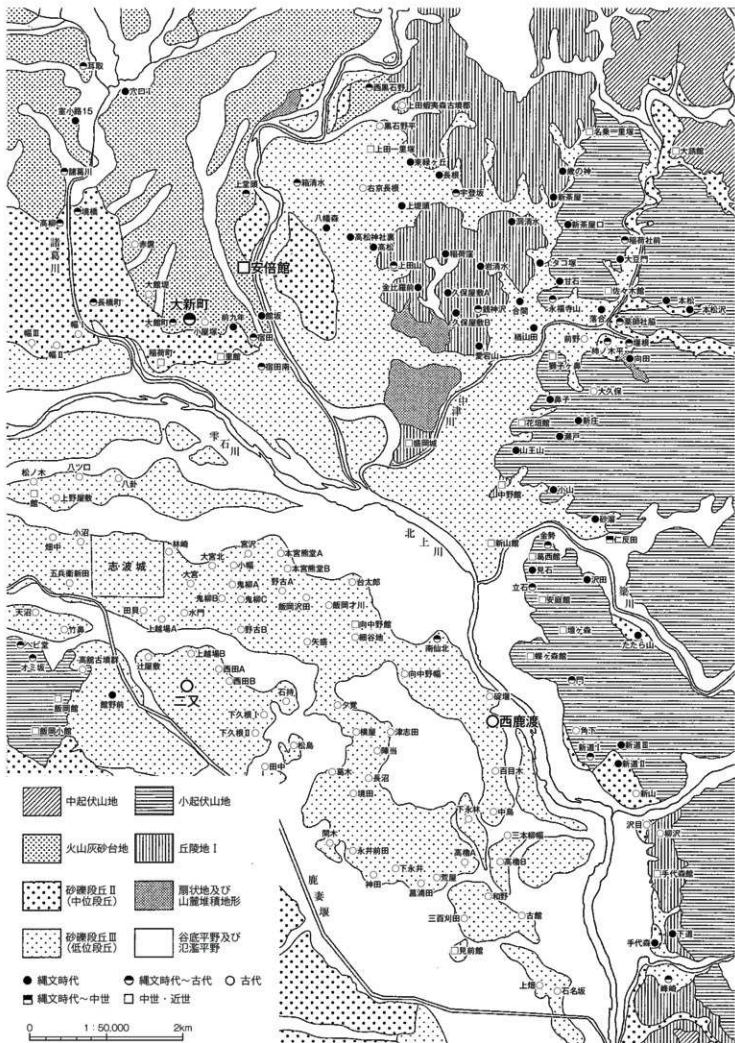
盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山(標高2,038m)を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地形・地質に大きく影響を及ぼしている。

北上山地 北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、古生代や中生代の堆積岩及び花崗岩からなる。これまで、北上山地の地質を南北に区分する境界新層帯は「早池峰構造体」と呼ばれていたが、近年の研究によって地帯区分の整理が進み、現在、北上山地の地質はその構造史より、北部北上帯、南部北上帯とその間に分布する根田茂帯の大きく三つに分けられる。盛岡市東部は、根田茂帯の西縁にあたる。これらの山地縁辺には、中津川・築川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。

盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。

築川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山(標高1,103m)の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道(宮古街道)に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

奥羽山脈 奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含まれる。雫石川は奥羽山脈より東流し、雫石盆地を形成する。その流れは烏泊山と箱ヶ森に挟まれた盛岡市北の浦付近におい



第1図 地形分類と周辺の遺跡分布

て急激に流路が狭められ、その狭窄部を抜けて北上平野に流れ込む。零石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なり、零石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩層なだらけ堆積物を基盤とした火山灰砂台地（滝沢台地）が広がっている。その範囲は滝沢市北部から盛岡市北部まで広範囲に及んでいる。

零石川南岸には、零石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。零石川は、これまでに何度も流路を変えており、零石川南岸に広がる沖積段丘の形成に大きな影響を及ぼしている。この沖積段丘は、水成砂礫層を基底とし、その上層に水成シルト、さらに表土が覆っている。このシルト層は旧河道などの低地形ばかりではなく、微高地にも堆積している。これは沖積段丘が、河道の定まらない零石川の下刻が周辺山地からもたらされる砂礫やシルトによって形成され、何度も堆積が繰り返されたことによるものである。零石川の旧河道は幾筋も確認されており、大きなものは4条、その他にも網目状に細かな旧河道が沖積段丘に広がっている。現在は圃場整備や宅地造成が進み、旧地形を留めているところは少なくなってきているが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる場所もある。

3 歴史的環境

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は、市街地から北東へ約20kmの藪川字外山に小石川遺跡が所在する。山間部の小河川に臨む台地上にあり、旧石器時代終末期の珪岩製尖頭器や黒曜石製の石核、剥片などが多数出土している。また、岩洞湖を隔てた対岸には細石刃と細石刃核が採集された大橋遺跡が位置する。

縄文時代 滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺跡からは、縄文時代草創期の「爪形文土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の3遺跡以外にも大館堤遺跡・館坂遺跡・前九年遺跡・宿田遺跡などで縄文時代早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期である。しかし、盛岡周辺に限っては北上山地内に散見するのみで遺跡の数は少なく、上八木田I遺跡・畑遺跡などで確認されている程度である。これは、約6,000年前に起こった岩手山の山体崩壊による自然災害の影響が関連していると考えられている。

縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加し、零石川南岸の沖積平野を除く、広い地域に分布する。繁V遺跡・大館町遺跡・柿ノ木平遺跡・川目C遺跡・湯沢遺跡など、主要河川の流域や山麓の扇状地状の地形などに大規模な拠点集落が営まれるようになる。

縄文時代後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿ノ木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落、萩内遺跡や湯壺遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。

弥生～古墳 弥生時代の遺跡数は少ないが、繁VI遺跡では前期の堅穴建物跡と中期の再葬墓が確認されてお

り、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡では、前期（砂沢式期）や後期（赤穴式期）の土器を伴う堅穴建物跡が確認されている。

古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で4～5世紀の北海道系の形態をもつ土坑墓群が確認されている。永福寺山遺跡では後北C2-D式土器と4世紀の土師器が共伴し、薬師社脇遺跡では、5世紀の土師器壺、甕、鉢、鉄鍬等の鉄器、管玉等の玉類が埋納されていた。

古 代 古墳時代終末から奈良時代にかけて、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。7世紀前半の遺構・遺物は少ないが、竹鼻遺跡で確認されている。7世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、8世紀代には太田蝦夷森古墳群、高館古墳群などの終末期古墳が築造され、野古A遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803年に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であると同時に、北方地域との結節点でもあったが、雫石川の水害を理由に、813年～814年には徳丹城（矢巾町）へ規模を縮小して移転している。その後9世紀中ごろより、陸奥北部の経営体制は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幡遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。同様の建物跡は堰根遺跡でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子がうかがえる。この時期の集落は沖積面だけではなく、上猪去遺跡・猪去館遺跡・新道Ⅱ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面部にも拡がりを見せる。

10世紀後半から12世紀までの遺跡は少ないが、大新町遺跡や小屋塚遺跡では、11世紀前半頃の掘立柱建物や堅穴跡と土器が出土しており、埴橋遺跡や宿田遺跡、上堂頭遺跡でも11世紀前半の遺構遺物が確認されている。また、赤炭遺跡では土器生産工房跡が確認され、数千点に及ぶ11世紀中葉の土器が出土している。これらは儀礼行為に供されたものとみられ、安倍氏の拠点である厨川橋・畑戸橋が近くに存在することを裏付けられるような調査成果が上がっている。

12世紀の村落や屋敷、居館の遺構は、落合遺跡・堰根遺跡・稲荷町遺跡などで確認されている。また、奥州藤原氏の影響下にあったとされる宗教遺跡も多数存在する。12世紀以降、街道筋や山頂などに経塚が築かれるようになり、内村遺跡では経塚に埋納したとみられる常滑窯産の大甕が出土しているほか、湯壺経塚からは常滑の三筋文壺、一本松経塚からは渥美窯産の甕が発見されている。大宮遺跡では、大溝から12～13世紀のかわらけが出土している。

中 世 鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のもと考えられている。これらの城館跡は丘陵や山頂など見晴らしの良い場所だけでなく、平野部の微高地などにも多数築かれている。現在の盛岡城の場所には南部氏の家臣であった福士氏が築いた北館（慶善館）、南館（談路館）からなる不來方城が存在した。

近 世 現在の城下の町並みの形成は、その南部氏の盛岡城築城から始まる。九戸合戦終結後の天正19年（1591）、南部信直は帰還する豊臣軍の軍監浅野長政から不來方城において、この不來方の地に新城を築くよう、積極的に奨められている（『祐清私記』）。その後、慶長2年（1597）から盛岡城の築城は始まり、寛永10年（1633）に一応の完成をみる。

Ⅱ 大新町遺跡(第85次調査)

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 大新町遺跡は、JR盛岡駅より北西約2.3kmの大新町地内に所在する(第2図)。かつては畑などが主体を占めていたが、昭和50年代以降、急速に宅地化が進められた。遺跡の範囲は東西約190m、南北約380mと推定され、現況は宅地、農地である(第3図)。

地形・地質 盛岡市周辺を含め、北上川流域には西岩手火山、東岩手火山、秋田駒ヶ岳火山起源の更新世～完新世火山灰が分布しており、大新町遺跡が立地する滝沢台地は、沖積段丘に相当する岩手山起源の大石渡石屑なだれ堆積物(滝沢泥流)を基盤とし、その上部に後期更新世～完新世の火山灰が覆う火山灰砂台地である。滝沢台地南東部は、東を流れる北上川に沿って南へ舌状に張り出しており、諸葛川・木賊川・菓子川などで開析され、幾筋もの埋没谷が入り込んでいる。大新町遺跡はその滝沢台地南縁の緩斜面上に立地している(第1図)。周辺には縄文時代中期の拠点集落である大館町遺跡(県指定史跡)をはじめ、大館堤遺跡・小屋塚遺跡など縄文時代早期～中期を中心とした遺跡が分布し、各遺跡は埋没谷などによって画されている。

滝沢台地上部は厚い火山灰で覆われており、下層より外山火山灰・洗民火山灰・分火山灰が堆積する。大新町及び大館町遺跡で遺構・遺物が確認されるのは、最上部の分火山灰層中からであり、主に岩手山・秋田駒ヶ岳に噴出起源を持つ火山灰で構成される。分火山灰層は、下層の十和田起源による八戸火山灰(層厚1～2cm)から表土直下までの堆積土を総称している。大新町遺跡及び大館町遺跡では、Ⅰ層(表土・表土下に堆積する黒色土)・Ⅱ層(黒色・黒褐色土主体-生出土スコリア含)・Ⅲ層(暗褐色土主体)・Ⅳ層(黒褐色主体-赤褐色スコリア含)・Ⅴ層(暗褐色土主体)・Ⅵ層(褐色土主体-上位より柳沢軽石・小岩井軽石・八戸火山灰)の6層に大別され、遺構・遺物が確認されているのは、Ⅵ層上部(縄文時代草創期)より上位の層からである。



第2図 大新町遺跡の位置 (1:50,000)

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の立地する滝沢台地上、台地縁辺下の沖積段丘面には、旧石器時代から近世の遺跡が分布する。

旧石器時代 館坂遺跡で、浪民火山灰層中から石器が採集されている。大新町遺跡・大館町遺跡・安倍館遺

縄文時代 跡からは縄文時代草創期の爪形文土器が出土し、後続する早期の遺跡が滝沢台地上では数多くあり、前述の3遺跡以外にも大館堤遺跡、館坂遺跡、前九年遺跡、宿田遺跡で早期初頭～末葉の土器が出土している。特に大新町遺跡は草創期から早期に至る濃密な遺物包含層が確認されており、早期の押型文土器や沈線文土器を伴う堅穴建物跡が複数確認されている。前期の遺跡は市内でも数が少なく、滝沢台地上の各遺跡からは遺物が散見する程度であり、主体的なものではない。大新町遺跡西隣の大館町遺跡は、北上川上～中流域における中期の拠点集落跡として、平成12年度に岩手県指定史跡に指定されている。大館堤遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡などはその派生的集落と考えられる。後期・晩期になると、明確な集落跡は確認されないが、大新町遺跡東部で後期の遺物包含層が形成されており、近傍に集落の存在が推定される。

弥生時代 大館町遺跡の南辺で弥生時代前期初頭の石囲炉を伴う堅穴建物跡1棟が確認されている。

古墳時代 滝沢台地南端の宿田遺跡と宿田南遺跡では、北海道系の後北C2-D式土器が出土し、安倍館
～古代 遺跡外館では後北C2-D式土器と土師器小型甕が共存して土坑から出土しているほか、近くから石製模造品（双孔円板）が採集されている。古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、宿田遺跡では北海道系の北大I式土器、5世紀代の土師器、黒曜石製の搔器、東海系土師器の宇田型甕が出土したほか、7世紀の円形周溝墓1基と8世紀の群集墳が確認されている。奈良時代になると、大館町遺跡、大新町遺跡、小屋塚遺跡で集落が営まれ、平安時代も継続する。

平安時代半ばの10世紀末から11世紀前半にかけて、陸奥鎮守府の在庁官人として台頭した安倍氏は、各要衝に拠点となる櫓を設置した。前九年合戦を記した陸奥話記には、厨川櫓、羅戸櫓が登場し、古くから盛岡市厨川に存在したと考えられてきたが、その遺跡は考古学的に明らかにされていない。この時代の遺構・遺物は、大新町遺跡、大館町遺跡、小屋塚遺跡で堅穴建物跡、掘立柱建物跡、大溝跡などが確認され、土師器の小皿や坏、内面あるいは内外両面にヘラミガキと黒色処理を施した高台付坏が多く出土する。その他、滝沢台地縁辺部に概ね分布する宿田遺跡、境橋遺跡、赤袋遺跡、稲荷町遺跡、上堂頭遺跡などで同様の土器が出土し、これらは安倍氏の拠点または関連施設と推定される。

中世 安倍・清原氏の滅亡後、藤原清衡は平泉に拠点を移し、奥羽两国を統治した。稲荷町遺跡や里館遺跡では、12世紀の堀を備えた居館や外郭施設が確認され、平泉藤原氏関連の館と考えられる。

鎌倉時代中期には、礫石経塚の宿田南経塚が築造される。栗谷川工藤氏の城館である里館遺跡、安倍館遺跡は、13世紀に里館遺跡が先に存在し、戦国期に至って栗谷川城（安倍館遺跡）が築かれ、16世紀に規模を拡大している。

近世 江戸時代には、盛岡城下から秋田領へ向かう秋田街道が雫石川北岸を通じ、安倍館遺跡の西側を鹿角街道が通じていた。里館遺跡や稲荷町遺跡では曲屋などの掘立柱建物跡や土坑墓などの近世の遺構が発見され、本地域は農家が点在する農村地帯となる。

2 調査内容

(1) これまでの調査

大新町遺跡は昭和40年代に武田良夫氏によって発見され、東北地方でも数少ない縄文時代早期前葉の遺跡として紹介された。昭和42年秋、武田氏は小屋塚遺跡（現 大新町遺跡）でV字状文内に横位の平行線を充填する日計式と異なる押型文土器を採集し、昭和44年の考古学ジャーナル第36号で「菱形文の衰退と沈線による平行横線から押型文による平行線状文への発展」という押型文土器の変遷を示し、日計式に後続する土器型式として「小屋塚式」を提唱した（後に「大新式」と変更）。同年秋、武田氏、吉田義昭氏、岩手大学草間俊一教授によって発掘調査が実施され、押型文土器の明確な資料とともに貝殻文土器の下層から出土する層位的事実を確認した。さらに武田氏は、昭和57年の赤い本創刊号で大新式が押型文土器から沈線貝殻文土器に変遷する過渡期の土器とした。

当市教育委員会による発掘調査は、昭和57年度に第1次調査が実施され、個人住宅建築や下水道管敷設に伴う発掘調査が主体を占め、以後令和元年度（平成31年度）まで43次にわたって調査し（第2表：調査次数は大館町遺跡と共有している）、上記の武田氏の見解を裏付ける早期資料が多数出土している。第19・21次調査では爪形文土器を中心とする縄文時代草創期の遺物が出土している。当該期の遺構は現在のところ未発見である。早期の堅穴建物跡は、遺跡中央部の頂部から南縁部の斜面部にかけて7棟が検出され（第35・47・62・70次調査）、うち5棟が押型文土器・沈線文土器に伴うものである。早期を主体とする遺物包含層は遺跡中央部から南縁部にかけて形成されており、押型文・沈線文系及び貝殻文・条痕文系土器群を包含している。中期の遺構は、貯蔵穴と考えられる土坑群が台地縁辺に沿う形で分布する以外は散在する状況である。本遺跡の東には、埋没谷を挟んで小屋塚遺跡が隣接し、この埋没谷は後期の遺物包含層となっている（第24・33次調査）。

第4・44・50次調査では奈良時代の堅穴建物跡が検出されている。遺跡南の第4・7・19・21・35・44・72・73次調査では堅穴建物跡、掘立柱建物跡、柵・柱列跡、大溝跡などが確認され、11世紀前葉～中葉に位置づけられる土器群が出土し、同様の遺構・遺物が確認されている大館町遺跡、小屋塚遺跡とともに安倍氏の拠点または関連施設と推定される。

(2) 令和元年度の調査

大新町遺跡における令和元年度の発掘調査は、国庫補助事業として実施した第85次調査で、個人住宅新築工事に伴う調査である。周辺の調査事例から、遺構・遺物の出土が予想されたため、工事着手前の本調査を実施した。

位 置 第85次調査区は、大新町遺跡の中央部やや北寄りに位置し、第3次調査区の北、第32次調査区の北西に近接する（第3図）。第3次・第32次調査区との間にはかつて小川が流れていたが、現在は堰となっている。調査区内はその堰に向かって北西から南東方向に緩やかに傾斜する地形で、検出面の標高値は133.600 m前後である。

調査点 番号	次数	所在地	調査内容	調査方法	時期	調査結果・遺物
大新町	1	大新町 1474	個人自宅遺跡	330	1980.8.13.12.26	縄文中期型穴建物跡 10 土坑 12 遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	2	大新町 1474-1	個人自宅遺跡	325	1980.8.20.12.26	縄文中期型穴建物跡 10 土坑 6 遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	3	大新町 2053	個人自宅遺跡	325	1981.10.21.10.27	縄文中期型穴建物跡 10 土坑 11 遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	4	大新町 2053	個人自宅遺跡	330	1981.10.21.10.27	縄文中期型穴建物跡 10 土坑 11 遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	5	大新町 159	個人自宅遺跡	231	1982.8.15.8.13	縄文中期型穴建物跡 10 土坑 20 遺物包含層
大新町	6	大新町 205	個人自宅遺跡	230	1982.8.16.8.25	遺物なし、縄文土層が不連続
大新町	7	大新町 205-8	個人自宅遺跡	196	1982.8.17.8.27	縄文中期型穴建物跡 2 土坑 9 早期遺物包含層
大新町	8	大新町 164	宅跡遺構	269	1982.8.17.8.27	縄文土層なし
大新町	9	大新町 164	宅跡遺構	410	1982.8.17.8.27	縄文中期型穴建物跡 2 土坑 2
大新町	10	大新町 152.1424	個人自宅遺跡	394	1982.5.6.13.8	縄文中期型穴建物跡 4 奈良型穴建物 17 早期一帯遺物包含層
大新町	11	大新町 147.30	個人自宅遺跡	72	1982.6.14.7.30	縄文中期型穴建物跡 16 土坑 3 遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	12	大新町 164	宅跡遺構	720	1983.05.11.19	縄文中期型穴建物跡 1 奈良型穴建物 2
大新町	13	大新町 114.1222	個人自宅遺跡	420	1984.4.8.23.29	縄文中期型穴建物跡 3 奈良型穴建物 3 土坑 10
大新町	14	大新町 17.22	個人自宅遺跡	26	1984.5.7.5.12	縄文早期一中期遺物包含層
大新町	15	大新町 164	宅跡遺構	726	1984.7.16.10.22	縄文中期型穴建物跡 6 奈良型穴建物 1 土坑 43
大新町	16	大新町 205	個人自宅遺跡	77	1984.11.27.11.29	遺物なし、縄文土層及び古代土層が少量
大新町	17	大新町 205-10	個人自宅遺跡	162	1985.4.8.4.20	縄文土層なし、早期遺物包含層
大新町	18	大新町 10.11	個人自宅遺跡	13	1985.5.1.5.18	縄文中期型穴建物跡 1 土坑 3 遺物包含層
大新町	19	大新町 514	個人自宅遺跡	332	1985.6.3.7.30	縄文中期型穴建物 27 奈良型穴建物跡 1 土坑 3
大新町	20	大新町 205.29	個人自宅遺跡	174	1986.8.28.10.2	縄文早期遺物包含層、時期不詳遺跡 1
大新町	21	大新町 5.95.10	個人自宅遺跡	413	1986.9.30.1.29	縄文後期土坑 4 奈良型一帯遺物包含層、奈良型穴建物跡 3 土坑 1
大新町	22	大新町 145.123.43.6	古墳下土層	17	1987.4.13.4.19	縄文中期型穴建物跡
大新町	23	大新町 7	古墳下土層	220	1987.5.18.6.6	縄文中期型穴建物跡 37 土坑 6 奈良型穴建物跡 1 土坑 3 13
大新町	24	大新町 310	個人自宅遺跡	60	1987.6.14.10	縄文後期遺物包含層
大新町	25	大新町 204.41	個人自宅遺跡	120	1987.6.15.6.17	縄文土層 3
大新町	26	大新町 16.15	宅跡遺構	180	1987.10.15.10.24	縄文土層
大新町	27	大新町 165.152	個人自宅遺跡	355	1988.4.13.5.20	縄文土層 1 ヴェット 11 遺物包含層
大新町	28	大新町 17.21	個人自宅遺跡	161	1988.5.24.6.16	縄文土層 4 ヴェット 9 早期遺物包含層
大新町	29	大新町 6	古墳下土層	305	1989.7.4.7.27.28.16	縄文中期型穴建物跡 12 遺物包含層、奈良型穴建物跡 1 土坑 1
大新町	30	大新町 43.8	宅跡遺構	65	1989.7.29.7.26	縄文土層 3 早期遺物包含層
大新町	31	大新町 6	古墳下土層	66	1989.10.13.10.29	縄文早期一帯遺物包含層、古代遺跡 1
大新町	32	大新町 165.17	個人自宅遺跡	158	1989.8.4.8.24	縄文早期一帯遺物包含層
大新町	33	大新町 205.7	個人自宅遺跡	389	1989.8.18.9.17	縄文早期一帯遺物包含層、時期不詳のピット 3
大新町	34	大新町 12.23	個人自宅遺跡	125	1989.5.19.6.1	縄文土層 1 早期一中期遺物包含層
大新町	35	大新町 10.4	個人自宅遺跡	493	1989.10.23.9.30	縄文早期一帯遺物包含層、縄文中期土坑 30 遺物包含層、平安朝跡 5
大新町	36	大新町 164	宅跡遺構	32	1990.4.14.4.16	遺物なし、縄文土層が不連続
大新町	37	大新町 145.8	個人自宅遺跡	173	1990.6.16.6.14	縄文中期型穴建物跡 11 奈良型穴建物跡 2 土坑 12 古代穴建物跡 2
大新町	38	大新町 61.13	個人自宅遺跡	113	1990.9.19.9.19	縄文中期土坑 1 遺物包含層
大新町	39	大新町 141	個人自宅遺跡	133	1990.10.9.9.29	縄文土層 1 早期遺物包含層
大新町	40	大新町 147.10.16.18.19	個人自宅遺跡	492	1991.7.4.11.15	縄文中期型穴建物跡 37 奈良型穴建物跡 1 土坑 16 遺跡、中期遺物包含層
大新町	41	大新町 121	個人自宅遺跡	439	1991.5.7.7.27	縄文中期型穴建物跡 11 奈良型穴建物跡 2 土坑 45 遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	42	大新町 10.16.14	古墳下土層	174	1991.6.14.6.28	遺物・遺構なし
大新町	43	大新町 1.27	個人自宅遺跡	31	1992.8.6.10.9	縄文中期型穴建物跡 4 土坑 1 穴建物跡
大新町	44	大新町 205.24	個人自宅遺跡	136	1992.4.13.5.11	縄文土層 4 奈良型一帯遺物包含層、奈良型穴建物跡 1 平安朝跡 1
大新町	45	大新町 21.21	個人自宅遺跡	380	1992.5.1.8.26	縄文中期型穴建物跡 5 奈良型穴建物跡 2 遺物包含層
大新町	46	大新町 13.9	個人自宅遺跡	144	1992.5.7.9.28	早期遺物包含層
大新町	47	大新町 17.25	個人自宅遺跡	194	1992.8.2.10.14	縄文早期型穴建物跡 1 遺物包含層
大新町	48	大新町 11.19	宅跡遺構	45	1992.12.1.2.29	遺物包含層、遺物包含層が不連続
大新町	49	大新町 21.41	宅跡遺構	337	1993.4.26	遺物なし、縄文土層が不連続
大新町	50	大新町 205.29	個人自宅遺跡	32	1993.6.7.1.15	縄文土層なし 早期遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	51	大新町 145.8	個人自宅遺跡	293	1993.6.25.6.24.29	縄文土層 6 ヴェット 6 遺物包含層
大新町	52	大新町 11.18	宅跡遺構	794	1993.10.12.12.22	縄文中期型穴建物跡 8 奈良型穴建物跡 2 土坑 2 遺跡 1
大新町	41 補	大新町 121	浄土池跡	17	1994.4.18.4.25	縄文中期型穴建物跡 1 土坑 1
大新町	53	大新町 11.18	宅跡遺構	799	1994.4.11.11.29	縄文中期型穴建物跡 50 土坑 50 奈良型穴建物跡 1 土坑 3 遺跡 4 13
大新町	54	大新町 143.3	個人自宅遺跡	24	1994.4.16.4.20	縄文早期型穴建物跡 2 土坑 1 縄文中期型穴建物跡 33 奈良型穴建物跡 1 土坑 1 奈良型穴建物跡 1 早期一中期遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	55	大新町 141.247.2-2.148.8	個人自宅遺跡	141	1995.10.5.12.15	縄文中期型穴建物跡 3 遺跡 4 穴建物跡 1
大新町	56	大新町 13.19.15.17.142.9	古墳下土層	305	1995.10.16.11.18	縄文中期型穴建物跡 2 土坑 11 早期遺物包含層
大新町	57	大新町 164.1.54	個人自宅遺跡	29	1996.5.26	遺物・遺構なし
大新町	58	大新町 145.7	個人自宅遺跡	21	1996.8.21.8.29	縄文中期型穴建物跡 1 遺物包含層
大新町	59	大新町 141.247.2-2.148.8	個人自宅遺跡	37	1996.9.2.9.12	縄文中期型穴建物跡 2 土坑 4 穴建物跡 1 遺物包含層
大新町	60	大新町 61.22	個人自宅遺跡	148	1996.10.28.12.6	縄文中期型穴建物跡 2 土坑 4 穴建物跡 1 遺物包含層、時期不詳遺跡 1
大新町	61	大新町 13.6	個人自宅遺跡	267	1997.5.6.6.69	縄文土層 6 ヴェット 6 早期一中期遺物包含層
大新町	62	大新町 16.18	個人自宅遺跡	29	1997.5.6.6.20	縄文中期型穴建物跡 1 縄文土層 1 ヴェット 13 早期一中期遺物包含層
大新町	63	大新町 15.9	個人自宅遺跡	36	1997.5.29	遺物・遺構なし
大新町	64	大新町 1.8	個人自宅遺跡	33	1998.2.5.20	遺物・遺構なし
大新町	65	大新町 205.19	奈良型穴建物跡	27	1998.8.4	遺物・遺構なし
大新町	66	大新町 16.15.16	古墳下土層	150	1998.8.25.12.6.12.15	縄文中期型穴建物跡 6 奈良型穴建物跡 1 土坑 11
大新町	67	大新町 16.11	個人自宅遺跡	30	1999.7.1.7.23	遺物なし、縄文土層が 10 ヴェット層 2 穴建物跡 2
大新町	68	大新町 16.7	古墳下土層	24	1999.6.17	遺物・遺構なし
大新町	69	大新町 210.212.9	内府跡	435	2000.4.10.5.19	縄文中期型穴建物跡 9 土坑 6 奈良型穴建物跡 1
大新町	70	大新町 13.12	個人自宅遺跡	235	2000.5.19.6.20	縄文早期型穴建物跡 2 土坑 6 奈良型穴建物跡 1 遺物・奈良型穴建物跡 1 遺物包含層
大新町	71	大新町 207.238.8.1	内府跡	280	2001.7.10.8.10	奈良型穴建物跡 1 遺物・奈良型穴建物跡 1 遺物包含層
大新町	72	大新町 10.12	古墳下土層	73	2001.12.4.12.19	縄文早期土層 1 中期土層 5 縄文土層 1 早期一中期遺物包含層、奈良型穴建物跡 2
大新町	73	大新町 13.32	古墳下土層	3	2001.4.16.4.20	縄文中期型穴建物跡 1 奈良型穴建物跡 1 平安朝跡 1
大新町	74	大新町 10.2	個人自宅遺跡	94	2001.8.3.8.7	遺物なし、縄文土層が不連続
大新町	75	大新町 207.239.3 の一部	内府跡	476	2002.5.12.12.20	縄文中期型穴建物跡 1 土坑 1 奈良型穴建物跡 4 中期一中期遺物包含層、奈良型穴建物跡 1
大新町	76	大新町 17.11.27.9	古墳下土層	132	2002.8.8.8.8	縄文早期遺物包含層
大新町	77	大新町 209.1210 の一部	内府跡	320	2003.11.12.11.24	縄文早期型穴建物跡 5 土坑 10 平安朝跡 1 時期不詳遺跡 1
大新町	78	大新町 209.1210 の一部	内府跡	218	2007.12.12.12.14	縄文中期型穴建物跡 1 平安朝跡 1
大新町	79	大新町 16.18	個人自宅遺跡	29	2008.4.2	縄文土層 5 ヴェット 6 穴建物跡 2
大新町	80	大新町 17.10	個人自宅遺跡	32	2008.6.6.6.6	縄文土層 1 縄文土層が不連続
大新町	81	大新町 212	内府跡	330	2008.10.11.10.28	縄文中期型穴建物跡 3 土坑 10 穴建物跡 1 遺物包含層
大新町	82	大新町 10.130.142 の一部	個人自宅遺跡	62	2008.10.13.10.31	縄文中期土層 11 平安朝跡 2
大新町	83	大新町 13.18	個人自宅遺跡	27	2011.12.6	縄文土層 6 遺物包含層
大新町	84	大新町 16.18	個人自宅遺跡	37	2012.10.1.10.29	縄文中期型穴建物跡 7 土坑 12 早期遺物包含層、時期不詳のピット 1 土層
大新町	85	大新町 17.18	個人自宅遺跡	87	2010.8.15.8.05	縄文早期土層 1 ヴェット 2 遺物包含層
大新町	86	大新町 17.17	個人自宅遺跡	18	2010.9.29	縄文土層 1 ヴェット 2 遺物包含層

第2表 大館町遺跡・大新町遺跡調査一覧



第3図 大館町通跡・大新町通跡全体図

RY-100
(Y23,950)

RY-100
(Y24,000)

RY-150
(Y24,050)

RY-200
(Y24,100)

RY-250
(Y24,150)

RY-300
(Y24,200)

RY-350
(Y24,250)

RY-400
(Y24,300)

RY-450
(Y24,350)

RY-500
(Y24,400)

RY-250
(X-31,450)

RY-300
(X-31,500)

RY-350
(X-31,550)

RY-400
(X-31,600)

RY-450
(X-31,650)

RY-500
(X-31,700)



大館町通跡

大新町通跡

1975年

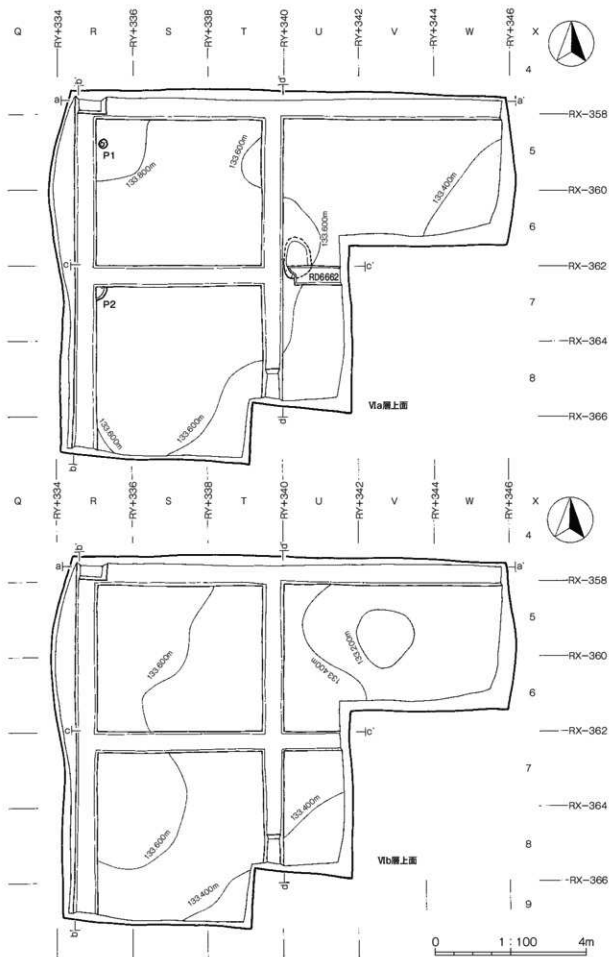
1973年

1976年

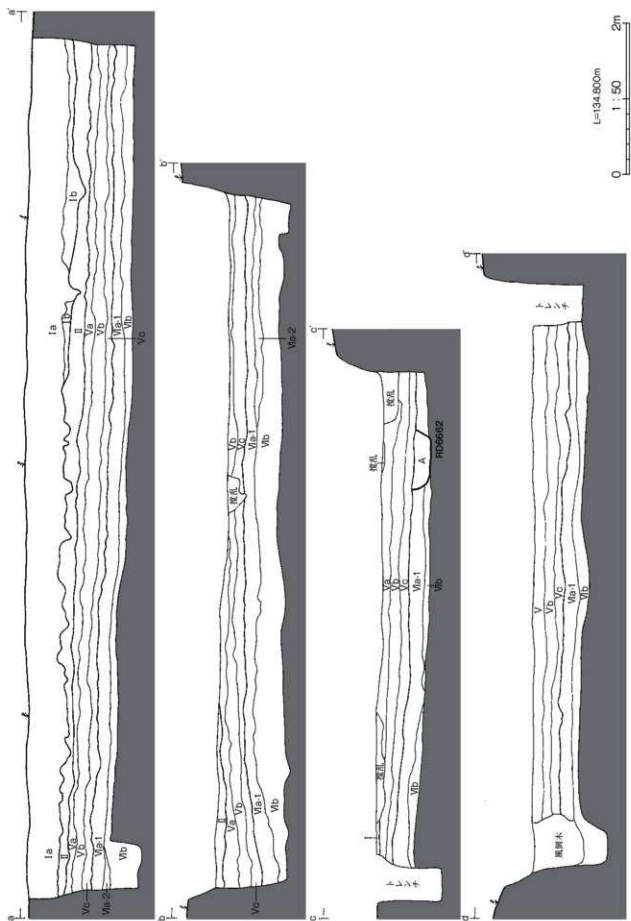
●基22

●基12

第1次 第2次 第3次 第4次 第5次 第6次 第7次 第8次 第9次 第10次 第11次 第12次 第13次 第14次 第15次 第16次 第17次 第18次 第19次 第20次 第21次 第22次 第23次 第24次 第25次 第26次 第27次 第28次 第29次 第30次 第31次 第32次 第33次 第34次 第35次 第36次 第37次 第38次 第39次 第40次 第41次 第42次 第43次 第44次 第45次 第46次 第47次 第48次 第49次 第50次 第51次 第52次 第53次 第54次 第55次 第56次 第57次 第58次 第59次 第60次 第61次 第62次 第63次 第64次 第65次 第66次 第67次 第68次 第69次 第70次 第71次 第72次 第73次 第74次 第75次 第76次 第77次 第78次 第79次 第80次 第81次 第82次 第83次 第84次 第85次



第4図 大新町遺跡第85次調査全体図



第5図 調査区土層断面図

基本層序 調査区内で確認された基本層序は以下のⅠ・Ⅱ・Ⅴ～Ⅶ層に大別され、Ⅰ・Ⅵ層は2層に、Ⅴ層は3層に細分される。Ⅰa層は表土層である。Ⅰb層は既存住宅建築以前の耕作土である。Ⅱ層は縄文時代中期の遺物を微量に含む黒色～黒褐色土層である。Ⅴ層は縄文時代早期の遺物を含む黒褐色～暗褐色土層である。Ⅵa層は褐色土を主体とする層でさらに2層(Ⅵa-1、Ⅵa-2)に細分される。Ⅵb層は赤褐色～青灰色粗粒軽石層(小岩井軽石層)である。その下層のⅦ層は褐色～明黄褐色粘土層(洪民火山灰層)となる。

検出状況 表土及び耕作土のⅠa・b層を除去したⅡ～Ⅴb層上面で検出作業を行った。

検出遺構 検出された遺構は、縄文時代早期の土坑1基(RD6662)、ピット2口である。さらに調査区全域から縄文時代早期を主体とした遺物包含層が確認された(第4・5図)。

出土遺物 出土遺物の時代・時期は、縄文時代早期前葉の縄文土器、石器が主体である。遺物総数は収納コンテナ(54cm×34cm×15cm)1箱分である。以下、各遺構等について記述を行う。

(3) 縄文時代の遺構・遺物

遺構検出状況(第4図)

今回の調査では縄文時代早期の土坑とピットが確認されたが、居住域を示すような遺構は確認されなかった。

RD6662土坑(第6図)

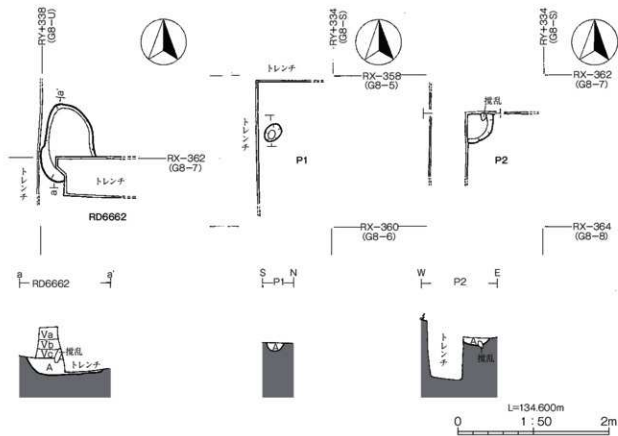
位置	調査区北東(G8-U6区)	平面形	不整楕円形
規模	長軸-上端1.03m以上、下端0.9m以上、短軸-上端0.72m以上、下端0.58以上		
重複関係	なし	掘込面	Ⅵa-1層上面
埋土	自然堆積で黒褐色土を主体とし、小粒～小塊状のぶい黄褐色土を多く含む。径1～3mmのスコリア粒を微量含み、やや硬く締まりがある。		
壁の状態	検出面から床面までの深さ0.22mで、外傾して立ち上がる。		
底の状態	Ⅵb層を掘り込んで底面としており、ほぼ平坦である。		
出土遺物	なし	時期	縄文時代早期

ピット(第6図)

調査区内でピットを2口検出している。いずれも検出面はⅥa-1層上面であるが、掘込面はⅤ層中であつた可能性がある。埋土は黒褐色土を主体とし、小粒状の暗褐色土を少量含み、径1～4mmのスコリア粒を微量に含む。遺物は出土していない。各ピットの規模及び検出面からの深さは、P1-径0.19m～0.25m、深さ0.11m、P2-径0.39m以上、深さ0.10mである。

(4) 遺物包含層・遺構外出土遺物

当調査区では縄文時代の遺物包含層が自然堆積で形成されており、特に早期を主体とした遺物が出土している。調査区内の堆積層は以下のⅠ～Ⅴ層に大別した。



第6図 RD6662 土坑、ピット

II層は過去の耕作等により削平・攪乱されているものの、調査区内の広い範囲で確認できる。縄文時代中期を中心とする遺物を微量に含む。主体となるV層は、全面にわたって地形に沿うように北西から南東に緩やかに傾斜して堆積する。VI a層は縄文時代草創期の爪形文土器を包含する層である。爪形文土器が多く出土した第20次・第21次調査区に近いことから、当調査区では全面にわたって精査を行ったが、礫石器の可能性のある小破片のみの出土にとどまった。この他、遺構外遺物として攪乱及び表土から縄文時代中期の土器片や、図示していないが、16世紀末～17世紀初頭の中国染付の丸皿口縁部片の他、近現代の清涼飲料瓶などのガラス製品等が出土している。

層位 I層-I a層は表土層、I b層は耕作土層である。

II層-黒色～黒褐色土を主体とし、やや軟らかい。縄文時代中期の遺物を微量に含む。

V層-黒褐色土～暗褐色土を主体とする層で、V a・V c層は径1～4mmのスコリア粒を少量含む。V b層はスコリア粒を多く含む、V a・V c層よりもやや締まりが強い。いずれも縄文時代早期の遺物を少量含む。V層に多く含まれるスコリア粒は、秋田駒ヶ岳火山を噴出起源とする堀切軽石と考えられる。

VI層-VI a層は暗褐色～褐色土を主体とし、小塊状の黄褐色土を含み、さらに2層(VI a-1・VI a-2)に細分される。VI a-2層はインボリューションによる地形の窪みと考えら

れ、VI a-1層に比べ暗褐色土の割合が多く、硬く締まりがある。全体的にV層よりもやや径の大きいスコリア粒を多く含み、硬く締まりが強い。VI b層は赤褐色～青灰色粗粒軽石層（小岩井軽石層）である。噴出時期は¹⁴C年代測定で11520 ± 730年、13470 ± 300年、16300 ± 550年という成果が得られている（土井 2000）。

Ⅶ層-黄褐色～明黄褐色粘土層（洪民火山灰層）で、噴出時期は33,000～34,000年前と推定されている（土井 2000）。

縄文時代の土器（第7図1～21）

早期前葉 1～11は早期前葉の押型文土器群で、大新町a式に属する。押型文は横位回転で施文されており、胎土に繊維と石英などの砂粒を含む。なお、文様の名称については第8図の模式図に準じている。1～5は横線V字状文2が施文される体部片である。6～8も横線V字状文2と考えられるが、小破片のため判断としない。9は胎土や焼成などから、押型文土器の無文部分と考えられる。10は横線X字状文または複合長菱形文と考えられ、4条の横位並行沈線を伴う。11は押型文に伴う縄文と考えられ、LR単節縄文が施される。12は平行沈線が施される口縁部片で、口唇部は断面が内削ぎ状を呈す。13～15は沈線土器で大新町b式（三戸式併行）に属する。同一個体と考えられ、胎土に繊維を含まず、石英などの砂粒や黒色鉱物を含み、内面にミガキ調整を施す。13は口縁部片で、口唇部外面に右上がりの刻目を施し、口唇部直下に横位の太沈線と格子目状の帯状細沈線文を縦位に施文する。14は屈曲する体部で、最大径部に横位の太沈線が廻り、その太沈線を境とした上部には、左上がりに斜行する7条程の細沈線で構成される帯状の平行沈線文に、右上がりに斜行する同様の帯状沈線文を組み合わせて施文し、下部には斜行する格子目状の帯状沈線文を施す。15は14の太沈線下部と同様である。

中期 16～21は縄文時代中期の深鉢である。16は口縁部片で沈線文が施され、大木7a式期に属する。17はキャリパー型の口縁部で複合口縁を呈し、外面にLR単節縄文を施文する。胎土は粗く砂粒を多く含む。18は深鉢の体～底部で、体部外面にLR単節縄文を施し、底部は編物痕をナデ消している。19・20は大木8b式期に属する深鉢体部片とみられ、19は隆沈線による渦巻文の一部、20は沈線に刺突列を施す。21は外面にRL単節縄文を施文する。

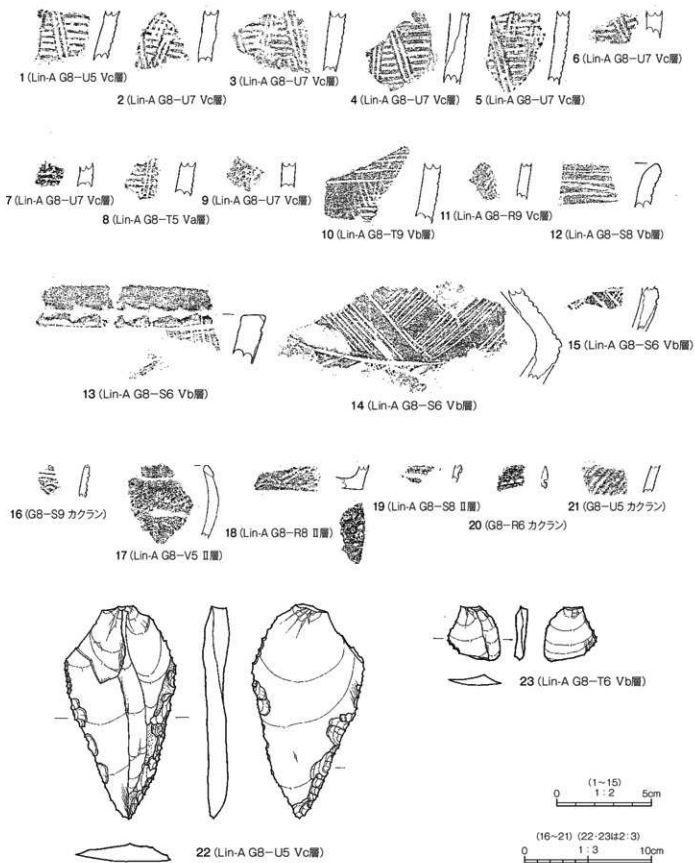
縄文時代の石器（第7図22・23）

22は頁岩製の削器で両面二側縁に調整を施し、両刃としている。23は頁岩製の剥片で、微細剥離が認められる。

(5) 調査のまとめ

大新町遺跡第85次調査で検出された遺構は、縄文時代早期の土坑1基（RD 6662）、ピット2口である。さらに調査区全域から縄文時代早期を主体とした遺物包含層が確認された。出土遺物の時代・時期は、縄文時代早期前葉の縄文土器、石器が主体である。ここでは主要な遺構・遺物について述べることとする。

遺構 RD 6662土坑からの遺物の出土はないが、遺構の掘込面から縄文時代早期に属する遺構と考えられる。各ピットについてもVI a層上面での検出であったが、検出状況から掘込面はV層中と考えられ、縄文時代早期に属する可能性がある。遺構の性格については判断としない。



第7図 遺物包含層出土遺物

包含層 縄文時代早期の遺物包含層（V層）が調査区全域にわたって確認され、特にV b・V c層から遺物が出土した。特筆されるのは、V c層からは押型文土器が出土し、V b層からは沈線文土器が出土するなど、点数は少ないが層理的に出土している点である。またV b層には、径1～5mm程の黄褐色～明褐色のスコリア粒が多く含まれる。この時期に降下した火山灰には、早期前葉の押型文土器以後、貝殻文土器以前の時期に降下したとされる堀切軽石（過去の分析結果によると、噴出時期は¹⁴C年代測定値で7,000～8,000年前とされている 土井2000）があげられる。本調査では、沈線文土器が出土したV b層に多く含まれていることから、これらは堀切軽石の可能性はあるが、特定には至っていない。堆積状況などから二次堆積である可能性がある。

本調査区は草創期の遺物が出土する遺跡中央部のやや北寄りに位置し、爪形文土器が多く出土した第20次・第21次調査区に比較的近いことから、草創期の爪形文土器を包含するVI a層を全面にわたって精査を行ったが、出土遺物は、礫石器の可能性のある凝灰岩の小破片の他、数点の自然石のみである。

遺物 出土した押型文土器（第7図1～10）は大新町a式に、沈線文土器（第7図13～15）は大新町b式に該当する。特筆すべきは体部の屈曲した沈線文土器である。昭和57年の第3・4次調査で、同様に体部が屈曲した遺物が出土しており、胎土や焼成、文様の構成などの特徴からこれらは同一個体である可能性が高い。これまで、その特異な形状から、器形を含め破片がどの部位にあたるかが判然としていなかった。その後の調査で出土した遺物が僅かに接合されたものの、器形の全容を把握するに至っておらず、本調査出土遺物との接合が期待されたが、接合されなかった。口縁部形状については、これまで小破片のみの出土であったため、平頭からやや内削ぎの口唇部で口縁部が垂直直味に外傾すると考えられていた。本調査では口縁部の比較的大きな破片が出土しており、これまでに置いや外傾する平頭から内削ぎとするならば、口縁部は緩やかな波状を呈す可能性がある。一方、体部の屈曲に合わせた角度のまま口縁部となるならば、内傾する内削ぎの口縁部を持つ器形である可能性も考えられるが、器形の全容把握には今後の調査による出土例の増加を待つ必要があるだろう。この遺物については、外面に付着していた炭化物の放射性炭素（¹⁴C）の年代測定と、炭素・窒素安定同位体分析（成分の特定）を行っており、年代については $8,620 \pm 30$ yrBPという結果が出ている。また炭化物の成分については、植物の堅果類や雑食・肉食の哺乳類が含まれるという結果が出ている（いずれも附章参照）。

まとめ 本調査では縄文時代早期の土坑1基とピット2口が確認された。本調査区は、縄文時代草創期・早期の遺物が多く出土した第3次・第4次調査区の北側に近接しているものの、遺跡中心部から堰を挟んだ北側になると遺構密度が低くなり、遺物包含層も希薄になることがわかった。また、堀切軽石の可能性のあるスコリア粒を多く含む層からは沈線文土器が出土し、その下層からは押型文土器が出土したことで、押型文土器と沈線文土器の時期関係についてこれまでの調査内容に沿う調査成果が得られた。

（参考文献）

土井宣夫 2000 『岩手山の地質－火山灰が語る噴火史－』 滝沢村教育委員会

	割付基本形	文						様	
V字状文									
		横線V字状文1	横線V字状文2	横線V字状文3	横線V字状文4	横線V字状文5			
X字状文									
		複合V字状文	重層V字状文	変形V字状文1	横線複合V字状文				
Y字状文									
		横線X字状文*	複合X字状文1*	複合X字状文2*	重層X字状文1	重層X字状文2	重層X字状文3*	重層X字状文4*	
長菱形文									
		横線Y字状文	重層Y字状文1	重層Y字状文2			複合Y字状文(1)*	複合Y字状文(2)*	
格子目文									
		横線長菱形文1	横線長菱形文2	複合長菱形文*	<重層長菱形文>*	重層長菱形文			
縦割文									
		斜長格子目文	斜長格子目文			格子目押線文*			
縦割文									
		横線縦割文1	横線縦割文2	横線縦割文3	横線斜線縦割文*	格子斜線縦割文1	格子斜線縦割文2		
縦割文									
		重層山形縦割文*	重層山形文*			横位平行線文	格子斜線縦割文3		

< >は大幅り遺跡出土押型文
*は確定復元

第8図 大新町遺跡出土押型文土器文様模式図

Ⅲ 西鹿渡遺跡(第37次調査)

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 西鹿渡遺跡は、JR盛岡駅より南東に約4.5kmの三本柳2地割地内に所在する(第9図)。遺跡範囲は南北約600m、東西約350mと推定され、かつては畑や果樹園などが多く見られたが、現在は宅地化が著しい場所である。

地形・地質 本遺跡の東を南流する北上川と本遺跡の北東約3.5km地点で合流する零石川は、これまでに幾度となく流路を変えており、北上川西岸と零石川南岸には細かい旧河道が網目状に確認されている。本遺跡はその旧河道によって画された低位沖積段丘上に立地している(第1図)。

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の北には礎環遺跡、南には百目木遺跡・下永林遺跡・三本柳幅遺跡・高槽A遺跡などが立地している。百目木遺跡では、大型商業施設建設に伴い旧都南村教育委員会が行った調査で、8世紀後半及び9世紀後半を中心とした堅穴建物跡が80棟あまり確認され、墨書土器や鉄製農耕具、糊痕のついた土器などが出土している。下永林遺跡からは昭和10年に蕨手刀1振(市指定文化財)が耕作中に出土しており、古墳群の存在がうかがわれていたが、区画整理事業に伴う平成28年度から令和元年度の調査で、8世紀から9世紀に帰属する円形周溝二十数基が確認されており、周辺集落の有力者を埋葬した墓域だったのではないかと考えられている。また、高槽A遺跡では8世紀後半から末頃を主体とした堅穴建物跡が30棟あまり確認されている。



第9図 西鹿渡遺跡の位置 (1:50,000)

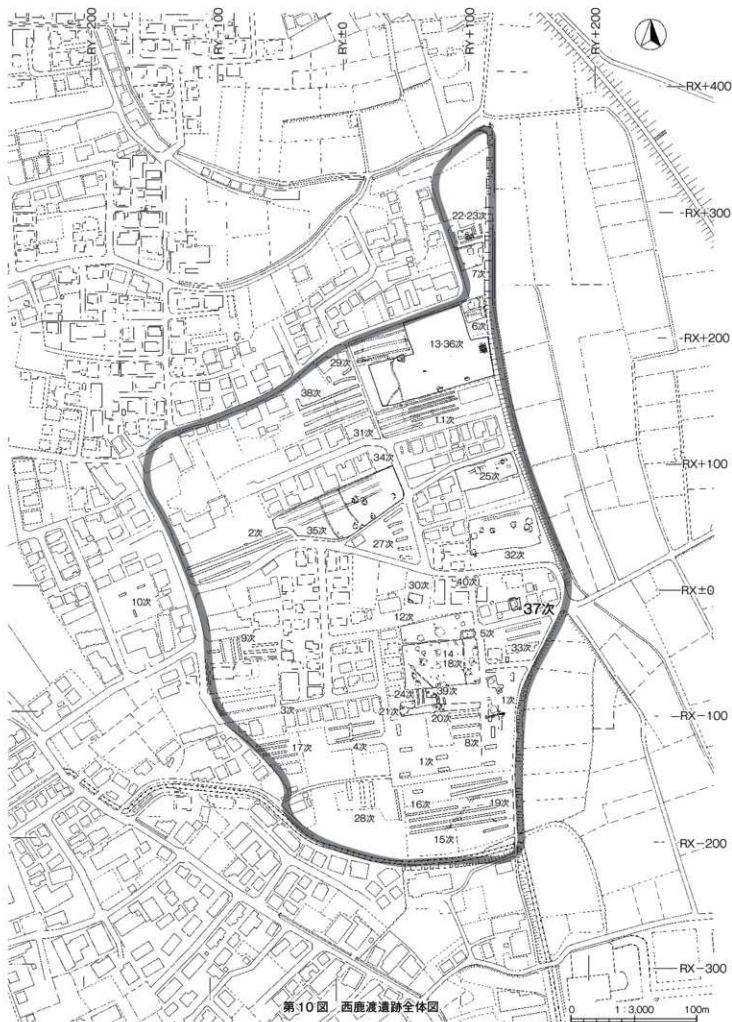
2 調査内容

(1) これまでの調査

本遺跡は、昭和55年の旧都南村教育委員会が実施した宅地造成に伴う調査（第1次調査）以降、宅地造成、個人住宅の建築、共同住宅の建築などに伴い、令和3年度まで40次にわたる調査が行われている（第3表）。耕作等により大きく攪乱され遺構や遺物が確認できない地点もあるが、奈良・平安時代の堅穴建物跡や溝跡、土坑などが確認されている。遺物は8世紀半ばから9世紀後半と考えられる奈良・平安時代の須恵器、あかやき土器、土師器、鉄製品、などが出土している。

次数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期間	検出遺構・遺物
1	三本柳2地割地内	宅地造成	1,000	1980/07/20-08/14	奈良・平安堅穴建物跡2種、時期不詳溝跡1
2 試掘	三本柳2地割 28-1, 2	宅地造成	652	1993/08/18-08/19	平安堅穴建物跡12、土坑4、古代以降溝跡1
3 試掘	三本柳2地割地内	宅地造成	100	1993/06/16	遺構・遺物なし
4 試掘	三本柳2地割地内	宅地造成	172	1993/12/20	遺構・遺物なし
5	三本柳2地割 36-2	防火水構建設	62	1994/09/01-09/03	奈良堅穴建物跡1、土坑2
6	三本柳2地割 22-7	個人住宅建築	291	1995/07/04-07/11	奈良堅穴建物跡1、土坑1、時期不詳溝跡1
7	三本柳2地割 16-6	個人住宅建築	393	1995/08/18-09/05	縄文土坑1、奈良堅穴建物跡2、土坑1
8 試掘	三本柳2地割 29-1	共同住宅建築	54	1997/11/11	遺構・遺物なし
9 試掘	三本柳2地割 47-5	共同住宅建築	268	1997/11/28	遺構・遺物なし
10 試掘	三本柳2地割 47-6	共同住宅建築	269	1998/02/12	遺構・遺物なし
11 試掘	三本柳2地割地内	共同住宅建築	196	1998/08/17	平安堅穴建物跡2
12	三本柳2地割地内	宅地造成	970	2002/10/01-12/02	奈良堅穴建物跡5、土坑3、近代溝跡1、土坑1
13 試掘	三本柳2地割 25-1	共同住宅建築	820	2002/07/23-07/25	奈良堅穴建物跡5、時期不詳溝跡3
14 試掘	三本柳2地割地内	宅地造成	555	2002/07/29-07/31	奈良堅穴建物跡13、時期不詳溝跡1
15 試掘	三本柳2地割地内	宅地造成・共同住宅建築	501	2002/11/25-11/28	平安土坑2、溝跡4
16 試掘	三本柳2地割 39-43	共同住宅建築に伴う構設設置	68	2003/04/16	遺構・遺物なし
17 試掘	三本柳2地割 42-1	共同住宅建築	146	2003/04/16	遺構・遺物なし
18	三本柳2地割 36-1～4	宅地造成	2,236	2003/06/02-08/02	堅穴建物跡（奈良13、平安4）、古代土坑17、古代以降溝跡5、時期不詳溝跡3
19	三本柳2地割地内	擁壁設置	102	2006/04/13-04/15	時期不詳溝跡2
20	三本柳2地割 49-50～66	下水道、進入路	329	2006/07/31-08/11	奈良堅穴建物跡2、堅穴跡1
21	三本柳2地割 49-50～66	個人住宅改装	62	2007/04/16-04/27	奈良堅穴建物跡1
22 試掘	三本柳2地割 16-35	個人住宅建築	77	2009/03/18	奈良堅穴建物跡3、土坑1
23	三本柳2地割 16-35	個人住宅建築	80	2009/06/01-06/12	奈良堅穴跡1、土坑3
24 試掘	三本柳2地割 39-64	個人住宅建築	43	2009/10/07	遺構・遺物なし
25 試掘	三本柳2地割 32-1	福祉施設建築	282	2009/12/25	奈良堅穴建物跡2
26 試掘	三本柳2地割 33-2, 3	宅地造成	367	2010/04/23	奈良堅穴建物跡4
27 試掘	三本柳2地割 31-1, 2 外	宅地造成	127	2012/06/15	遺構・遺物なし
28 試掘	三本柳2地割 42-1	宅地造成	165	2013/05/09	遺構・遺物なし
29 試掘	三本柳2地割 22-4～6	宅地造成	154	2014/04/30	遺構・遺物なし
30	三本柳2地割 35-17	個人住宅建築	73	2016/04/27-05/24	奈良堅穴建物跡1
31 試掘	三本柳2地割 26-3 外	宅地造成	240	2017/04/11	古代堅穴建物跡1、古代以降溝跡1
32	三本柳2地割 33-2	宅地造成	1,624	2017/05/15-07/28	奈良堅穴建物跡6、平安堅穴建物跡2
33 試掘	三本柳2地割 37-2	共同住宅	104	2017/10/11	遺構・遺物なし
34 試掘	三本柳2地割 29-2 外	個人住宅	20	2017/11/21	遺構なし
35	三本柳2地割 28-1	宅地造成	3,032	2018/04/09-07/17	奈良・平安堅穴建物跡5、堅穴跡1、古代以降土坑4、溝跡2
36	三本柳2地割 22-3 外	宅地造成	4,552	2019/04/17-07/11	奈良堅穴建物跡1、古代以降土坑2、溝跡1
37	三本柳2地割 37-9	個人住宅	66	2019/05/31-07/02	奈良堅穴建物跡1、土坑6
38 試掘	三本柳2地割 23-1 外	宅地造成	476	2020/05/12-05/13	遺構なし、土師器片
39	三本柳2地割 39-64 外	個人住宅	84	2020/08/18-09/04	奈良堅穴建物跡1、土坑1、古代以降土坑1
40 試掘	三本柳2地割 35-5, 8	個人住宅	35	2020/08/24	遺構なし

第3表 西鹿渡遺跡調査一覧



第10図 西鹿渡遺跡全体図

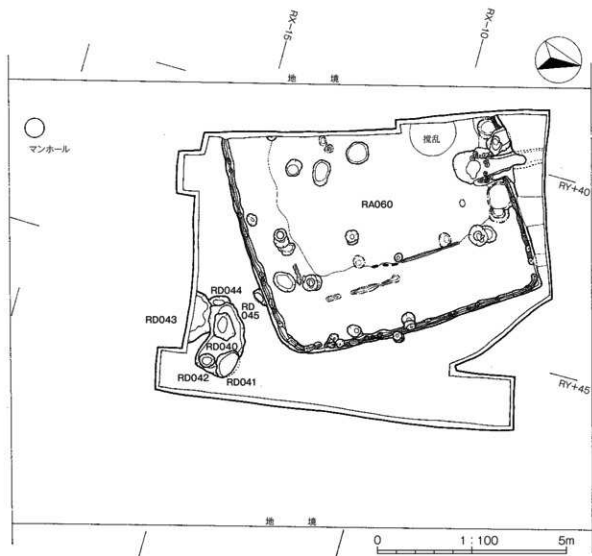
(2) 令和元年度の調査

位置 第37次調査区は西鹿渡遺跡の中央部の南東よりに位置し、平成14年度に行われた第12次調査区の東側にあたる(第10図)。隣接地での調査事例はないが、西側の第12次調査区とその南側に隣接する第18次調査区周辺は、本道跡の中でも古代の堅穴建物跡が多く確認されている区域である。本調査では、事前の試掘調査で遺構が確認されたため、建物建築予定部分に関してのみ調査を行った。調査区内はほぼ平坦で、検出面の標高値は114.700 m前後である。

基本層序 調査区内で確認された基本層序はⅠ～Ⅲ層に大別される。Ⅰ層は表土である。Ⅱ層は暗褐色土層でその上面が遺構検出面であるが、旧住宅による削平と攪乱が著しい。Ⅲ層は褐色シルト層(地山)で、RA 060 堅穴建物内の壁から底面にかけて確認している。

検出状況 Ⅰ層を除去した後、Ⅱ層上面で遺構の検出を行ったほか、浅い攪乱については極力掘り上げた。検出面までの深さは現地表面から0.20 m～0.30 mである。

検出遺構 検出された遺構は奈良時代の堅穴建物跡1棟(RA 060)、土坑6基(RD 040～045)、古代または古代以後の柱穴または柱穴状ピット9口である(第11図・第20図)。



第11図 西鹿渡遺跡第37次調査全体図

RAO60竪穴建物跡 (第12図～第14図)

位置 調査区北西側 平面形 隅丸方形 (西壁は調査区外) 主軸方向 N 31° W

規模 新时期 北-南 7.46 m 西-東 6.20 m以上

旧期 北-南 6.20 m 西-東 5.04 m以上

重複関係 RD 045土坑と柱穴群P9を切り、柱穴群P1～P8に竪穴の壁や埋土を掘り込まれる。

検出面 II層上面 掘込面 削平 時期 8世紀中葉～後葉

竪穴埋土 すべて人為堆積で埋め戻されている。全般に黒色土ないし黒褐色土主体で、地山の褐色シルトや暗褐色土のブロックを多く含む、硬質である。特にA層～B層の層厚は薄く、竪穴中央部では版築状に突き固められており、締まりよく、極めて硬質である。

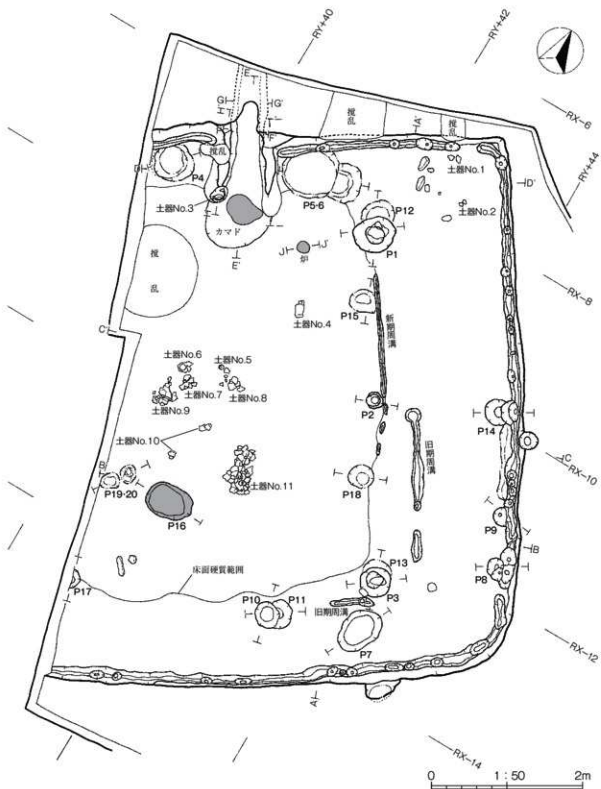
層	土層の内容	層の構造	しまり・硬さ
A1	黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトを極微量に含む。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
A2	黒褐色土を主体とし、暗褐色土と焼土及び木炭粒を極微量に含む。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
A3	黒褐色土を主体とし、暗赤褐色の焼土粒を少量含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
A4	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを少量含む。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
A5	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
A6	黒褐色土を主体とし、褐色シルトをやや多く含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
B1	黒褐色土を主体とし、黄褐色シルトを多く含む。	粒状	極めて締りあり、極めて硬質
B2	黒褐色土を主体とし、褐色シルトをやや多く含む。	粒状	極めて締りあり、極めて硬質
B3	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを多く含む。	塊状	極めて締りあり、極めて硬質
B4	黒褐色土を主体とし、黒色土少量、及び褐色シルトをやや多く含む。	粒状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
B5	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを含む。	塊状	極めて締りあり、極めて硬質
B6	黒褐色土を主体とし、褐色シルトをやや多く含む。	粒状	極めて締りあり、極めて硬質
B7	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを少量含む。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
B8	黒褐色土を主体とし、暗褐色土と褐色シルトを共に多く含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
B9	黒褐色土を主体とし、褐色シルトをやや多く含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
B10	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを少量含む。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
B11	黒褐色土を主体とし、暗褐色土と褐色シルトをやや多く含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
B12	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを多く含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
C1	黒褐色土を主体とし、明るい褐色シルトを多量に含む。	粒状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
C2	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを多量に含む。	粒状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
C3	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを少量含む。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
D1	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを多く含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
D2	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを多く含む。	粒状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
D3	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを微量含む。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
D4	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを極微量に含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
D5	黒褐色土を主体とし、褐色シルトを極微量に含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質

第4表 RAO60竪穴建物跡埋土観察表(1)

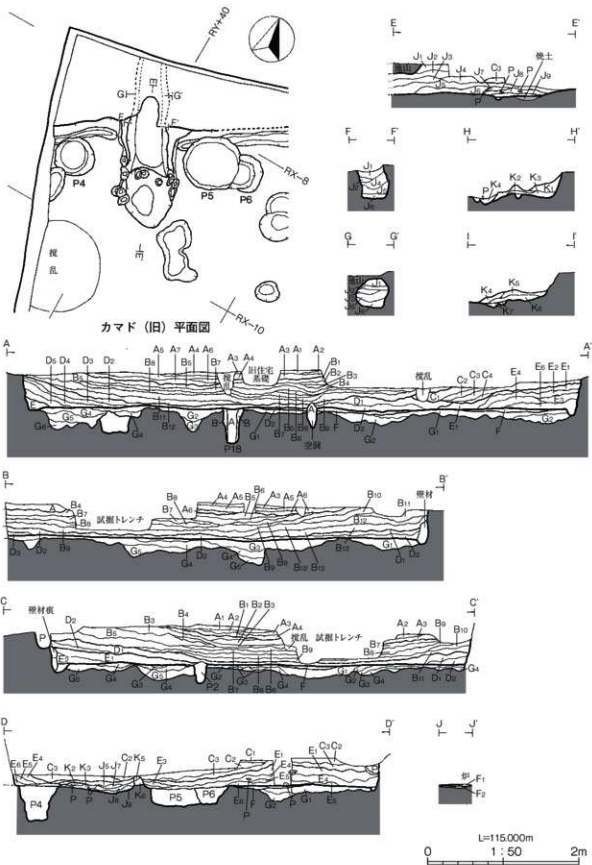
層	土層の内容	層の構造	しまり・硬さ
E ₁	黒褐色土と褐色シルトの混合土。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
E ₂	黒褐色土主体で、褐色シルトを大量に含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
E ₃	黒褐色土主体で、褐色シルトを少量含む。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
E ₄	褐色シルト主体で、多くの黒褐色土と、明黄褐色土を少量含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
E ₅	黒褐色土主体で、褐色シルトと赤褐色焼土が多く混入する。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
E ₆	黒色土主体で、黒褐色土が混入する。	粉状	極めて締りあり、極めて硬質
F ₁	暗褐色土主体で、黒褐色土と褐色シルトを微量に含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
F ₂	暗褐色土主体で、褐色シルトを少量含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
G ₁	黒褐色土主体で、黒色土を多く含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
G ₂	褐色シルト主体で、黒褐色土を少量含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
G ₃	褐色シルト主体で、黒褐色土を多量に含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
G ₄	褐色シルト主体で、黒褐色土を含む。	粉状～粒状	極めて締りあり、極めて硬質
G ₅	黒褐色土主体で、褐色シルトを少量含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質
G ₆	褐色シルト主体で、黒褐色土を少量含む。	粉状～塊状	極めて締りあり、極めて硬質

第5表 RA060竪穴建物跡埋土観察表(2)

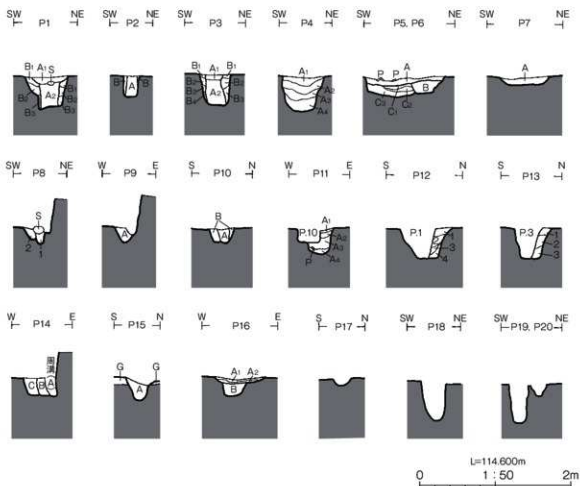
- 壁の状態** 竪穴の壁は概ね垂直に近い。壁の残存高は0.30 m～0.48 mである。北東隅の壁は直角に掘られているが、南東隅は隅丸形である。調査範囲内の壁下の周溝は、カマド部分を除き、ほぼ全周している。北東隅の周溝は隅丸形に掘られ、壁とは少し距離がある。溝の幅は0.12 m～0.18 m、深さは0.10 m～0.12 m。溝の底面には杭を打ち込んだような穴が不規則で並んでいる。東壁の壁溝や杭状の穴には、一部重複が認められ、新しい時期には、東壁を外側に0.20 mほど括けている。なお、竪穴の南東部、東側壁から西へ1.10 m～1.20 m、南壁から北へ1.00 mの位置に、幅0.08 m～0.15 m、深さ0.04 m内外の溝が断続的に認められ、杭状の穴を伴う。床を現した当初は確認されず、床面を繰り返し精査した結果、確認した溝であり、旧期の竪穴建物の周溝であろう。
- 床の状態** ほぼ平坦であるも、カマドの焚口付近はやや低みになっている。後述する主柱穴に開かれた範囲は特に硬く踏み固められ、よく締まっている。カマドの東側から南東側にかけては、部分的な貼り床のF層が堆積する。この硬化部分の東辺には、幅0.80 m内外、深さ0.04 m内外の圧痕とみられる溝がある。溝の底部は細く尖っている。
- カマド** 北壁中央に構築される。煙道は地山を削り貫いて造られているが、先端の煙出しは調査区外である。煙道の天井部は、南よりの天井が崩落し、北より部分のみ残存していた。トンネル状に残存する箇所は、幅0.38 m、高さ0.40 mで、略円形に掘られ、底は平坦である。カマド燃焼部は大半が崩落し、基底部が袖状に残存していた。燃焼部の基底部は高さ0.06 mから0.16 m残存し、構築土(K層)は暗褐色土と褐色シルト、暗赤褐色の焼土を混ぜて積み上げ、構築している。西側袖の先端部には径0.20 m、深さ0.12 mのピットがあり、土師器甕の口縁部破片が、逆さまの状態に重複し、残存していた。ただし、これがカマド構築に使用されていた土器の一部なのか、たまたまその位置に残存した土器破片なのかは判別困難であった。東袖には倒立土器や痕跡は確認さ



第12図 RA060竪穴建物跡平面図(1)



第13図 RA060 竪穴建物跡平面図(2)・土層断面図(1)



第14図 RA060竪穴建物跡土層断面図(2)

れなかった。焚口部は竪穴床面よりも0.05mほど低く、中央にやや不正形な火床面が残存している。カマド袖を取り除くと、下に礎を立てた穴が存在した。火床面近くには2個の支柱を立てた穴が認められる。これら穴の深さは0.03m～0.08mである。また、カマドの燃焼部からは、カマド壁の一部と思われる、焼けた粘土塊が1点出土している。

当初のカマドは袖の芯に川原石を用いて、さらに土を盛って燃焼部を構築しており、次に土器器臺を焚口部に用いた形に構築し直したことが分かる。

竪穴内の床面上には長さ20cm～26cm、太さ8cmほどの被熱した礎が5個、径6cm～8cmの礎が7個確認されている。

地床炉 カマド焚口の南東0.50mのところ、新期の床面(F層上面)に、径0.18mの小さな地床炉がある。焼土は深さ0.02m浸透している。

柱穴・穴 床面上で確認された穴は17口あり、このうち、P1・P2・P3は柱痕跡が認められた。この3つの柱穴は、東壁から2.35mの位置に直線に並び、間隔は柱穴1と柱穴2が2.18m、柱穴2と柱穴3が2.40mである。北壁と柱穴1の距離は1.27m、南壁と柱穴3の距離は1.35mである。柱穴1と柱穴3は、径0.50m内外の円形柱穴で、深さは1が0.41m、3が0.42mあり、径0.24mの円い柱痕跡が確認されている。柱穴1は柱穴12を、柱穴3は柱穴13を切っている。12と13は、穴の大きさから柱穴1・3と同規模の柱穴で、柱の建て替えが行われていることになる。柱穴2は1と3のほぼ中間にあり、径0.22m、深さ0.28mの柱穴で、径0.15mの柱痕跡が認めら

れた。柱痕跡は上部がほぼ空洞で、堅穴床面から0.08 mの高さまで認められた。この3つの柱穴と、柱穴17が新期の堅穴建物の主柱穴で、南北2間、東西1間の配置である。柱穴17は調査区の壁際に一部が確認されたもので、確認された深さは0.15 mであるが、最深部は調査区外のため不明である。

また新規の主柱穴の内、北西部の柱穴は調査区外である。新規の柱穴よりもやや内側にP 15、P 18、P 19の柱穴がある。このうち柱穴15と柱穴18は、床面を現した当初は確認できず、床面精査を進める過程で確認した。柱穴19は貼り床除去後に確認できたものである。これらは旧期の主柱穴、間隔はP 15とP 18が2.40 m、P 18とP 19が3.34 mである。

カマドの西側のP 4と、カマド東側のP 6は柱穴状の穴であるが、柱痕跡は確認されていない。P 5は堅穴周溝とP 6に切られているが、内部には黒褐色土と褐色シルトの混合土が埋め戻されている。埋土中から土師器甕の細かな破片が出土している。

P 7は0.45 m×0.64 m深さ0.10 mの皿状の穴。P 10、P 11は南壁近くに重複する穴で、P 10が新しい。

P 8・P 9・P 14は周溝に切られた小ピットで、周溝の重複とともに、新期堅穴建物の東壁の造り替えを示す。

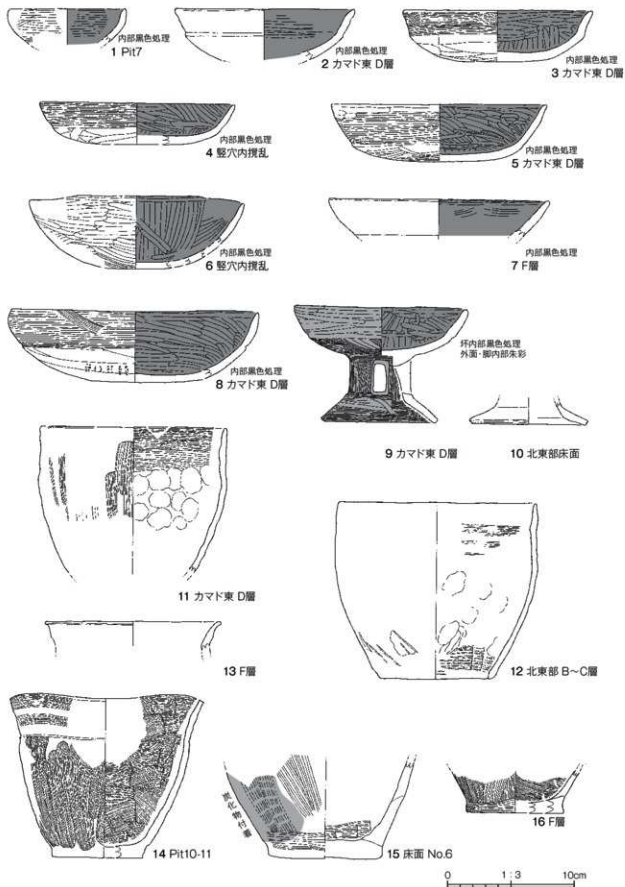
P 16は径0.44 m×0.62 mの楕円形の穴で、深さは0.08 m。この内部に暗赤褐色の焼土と、黒褐色土が混合し、堆積していた。底面に焼土の浸透は認められなかった。埋土を篩に掛けたが、出土遺物はなく、鍛造銅片なども見つからなかった。

出土遺物（第15図～第19図）

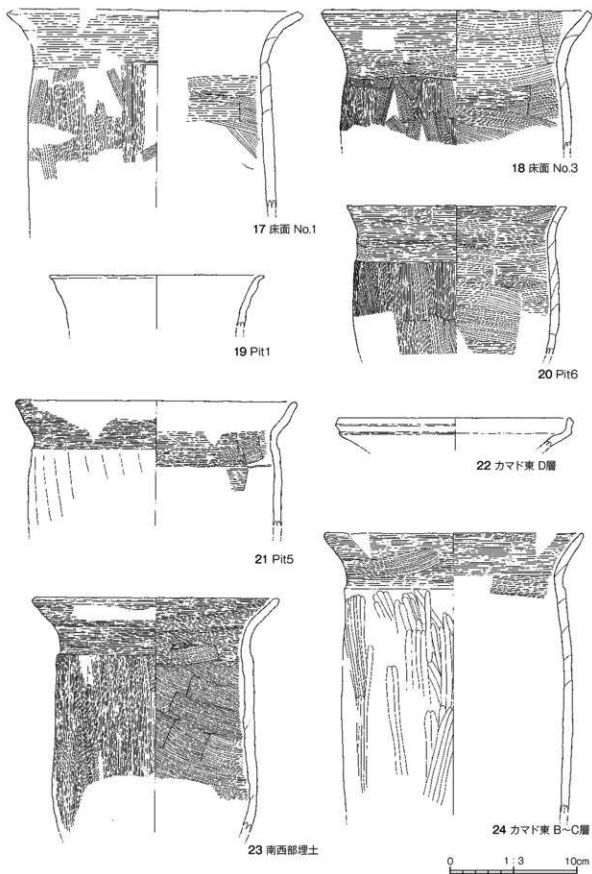
この堅穴建物からは、堅穴の床下、床面、ピット内、堅穴埋土の各層から、土師器環、甕などが多く出土している。特に多かったのは、カマド東側のカマド崩壊土（J層）や、カマド東から北東部のD層、E層からの出土で、第15図9の高坏もカマド東側北壁近くのD層からの出土である。また、床面中央部付近には、多くの土師器甕類のほか、土製紡錘車、東壁周溝からは鉄製刀子の茎と砥石が出土している。

なお、堅穴埋土を掘り込んだ、旧住宅に係る攪乱から出土した土器も、本遺構起源の遺物である可能性が高いため、併せて報告する。

土器（第15図1～第18図31）はすべて奈良時代の土師器であり、須恵器は出土していない。1～8は坏で、底部は丸底である。このうち1と6は、器面内外とも丁寧なヘラ磨きにより、口縁部と体部の境がない。これに対し、2・3・4・5・7・8は、内面は段が残らないが、口外面の口縁部と体部境に、わずかな段を残している。1は小形坏で、内外ヘラ磨きの後、全体を黒色処理している。2は、内面ヘラ磨き後に黒色処理している。3・4・5は内面が丁寧なヘラ磨きされ、丸底ではあるも、底部中央が平坦に近いものである。このうち3と4は体部外面ヘラ削り後口縁部ナデ調整。5は体部外面ヘラ削り後口縁部ナデ調整し、口縁部、体部の一部をヘラ磨きしている。6・7・8は、この堅穴建物出土土器の中では、比較的大ぶりの坏で、8の底部は整形段階で板の小口もしくはアテ工具で整えた後、ヘラ削り後、口縁部をナデ調整している。9と10は高坏である。9は外面と脚部内面を赤色顔料で彩色した高坏で、坏部内面はヘラ磨き後、黒色処理されている。脚の下部は外側へ折れてラッパ状に開く。上部は円筒形に立ち上がり、四方に長方形の透かしがある。外面は全体をナデ調整した後、坏部口縁から体部上半と、脚部の透



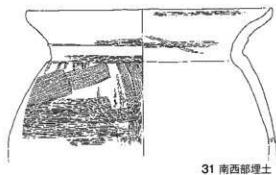
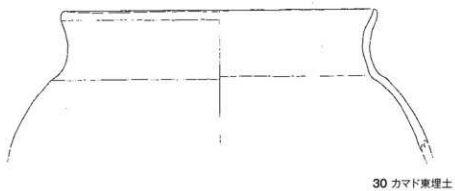
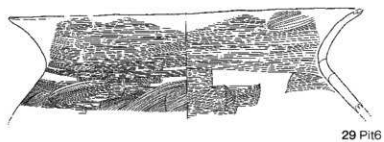
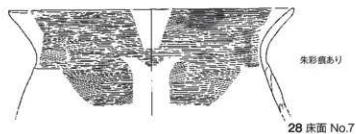
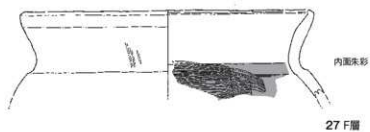
第 15 図 RA060 竪穴建物跡出土土器 (1)



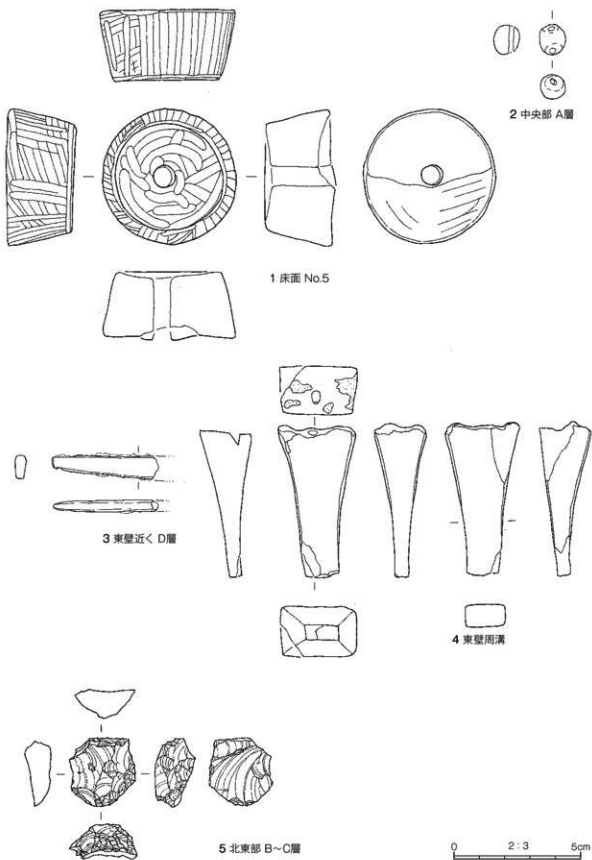
第16図 RA060 竪穴建物跡出土土器(2)



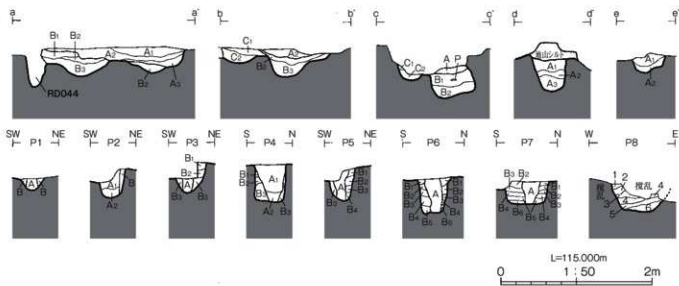
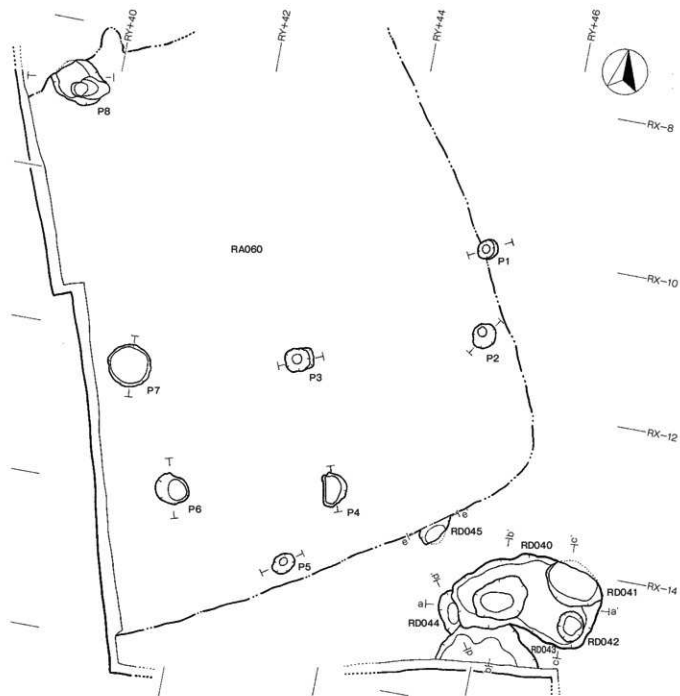
第 17 図 RA060 竪穴建物跡出土土器 (3)



第18図 RA060 竪穴建物跡出土土器(4)



第19圖 RA060 竪穴建物跡出土石器・土製品・石製品・鉄製品



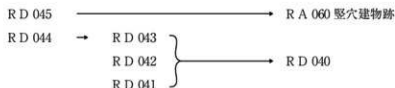
第20図 RD040~045土坑・柱穴・柱穴状ビット

かしの下部分を横方向にヘラ磨きしている。10は高坏の脚部下端の破片である。11と12は瓶である。11は底部を欠失。12は丸く底を開けている。13・14・15・16は小形甕で、内外刷毛目調整されている。15・16は小形甕の底部である。17～24は長胴甕である。このうち22は口縁部を三段に作る。25～31は球胴甕である。25・26は頸部外面に段を持ち、25は口縁部外面にナデ、口縁部内面から体部内面、体部外面は刷毛目調整である。26口縁部ナデ調整の後、口縁部下から頸部、体部外面、内面全てを刷毛目調整している。31はやや小型の球胴甕である。

第19図1は土製紡錘車で、各面をヘラ磨き後に黒色処理されている。2は土製の玉で穿孔がある。3は鉄製刀子の茎。4は石製の砥石である。5は黒曜石製の拇指状搔器である。

RD040～045土坑 (第20図)

土坑 調査区南東部に6基からなる土坑群が確認された。この重複関係は次のとおりである。



土坑はいずれも、プランや断面形状ともに不整形であり、壁や底面の不明瞭なものが多い。このうちRD 040は、東西1.90 m、南北1.10 mの土坑で、断面は一部が深い皿状。埋土は黒褐色土主体で、焼土粒や木炭粒が多く混入している。他の5基の土坑は、ほとんど同時に空いていた可能性が高く、最後のRD 040は、不整形な土坑群をまとめて埋めて平坦にし、そこに焼土や灰などの土を埋めたように見える。調査時に土坑として取り扱ったが、実態は、風倒木痕の窪みに、焼け土などを投棄した痕跡と考えられる。

出土遺物は、RD 040から土師器甕の体部破片6点、RD 042から土師器甕体部破片1点、RD 043から土師器甕体部破片1点、RD 045から土師器甕体部破片1点が出土しているが、どれも細片で図示できるものはない。

柱穴群 (第20図)

柱穴群 竪穴建物に重複して、9口の柱穴、または柱穴状の穴が確認された。このうちP1～P8までは、RA 060 竪穴建物跡が埋没した後に掘り込まれた穴であり、P1～P7には柱痕跡が認められた。P9は柱痕跡が認められなかったが、RA 060 竪穴建物の床構築土よりも古い穴であることが、竪穴建物跡土層断面A-A'で確認されている。

P7とP8は、穴の径が0.70 m～0.90 mあり、比較的大型の柱穴または柱穴状ビットで、掘立柱建物の柱に相応しい。P6がこれに次ぎ、径0.56 mである。P7とP6は径0.20 mを超える柱痕跡があり、柱穴掘方埋土は、粗い版築状で丁寧に埋められている。P1～P5は比較的小型の柱穴で、柱痕跡は径0.15 m～径0.20 mである。

柱穴群からの出土遺物はない。

(3) 調査のまとめ

R A 060 堅穴建物跡は、一辺の長さが7 mを越える規模であり、本遺跡内の堅穴建物では、最大規模のグループに入る。旧期の堅穴の規模は東西4.90 m、南北6.30 mと推定され、主柱穴はP 15・P 18・P 19を含む4本の配置だった。次に、新时期には、東壁、西壁、南壁を大きく拡張して、一辺7.20 mの大型堅穴建物となり、北壁中央にカマドが設けられた。この時、主柱穴は、柱穴の重複状況からP 12・P 13を含む4本であったと考えられる（新期1）。次に堅穴建物規模は概ねそのままとしながら、東壁を部分的に拡張し、カマド燃焼部を造り変えた。これと、床面はF層の貼床が、カマドや堅穴の一部造り替えに対応するものである。カマド南東の小さな炉は、F層上面に確認されている。柱穴配置は、東側主柱穴P 1とP 3の間にやや小さな柱P 2を立て、西側にはP 17がP 3に対応し、左右三本宛の6本柱（1間×2間）の配置となった（新期2）。主柱穴に囲まれた床は踏みしめられて硬くなっている。これよりも壁際までの床面は幾分か柔らかく、堅穴中央部は土間、主柱穴よりも外側は、板敷または敷物が用いられていたと推定される。堅穴建物から出土した土器群は、土師器の坏、朱塗りの高坏、甗、小形甗、球甗、長甗があり、これらの特徴は8世紀半ばから後半にかけてのものである。床面から土製紡錘車が出土していることから、この堅穴建物内で、蚕や麻などの繊維から、糸を紡ぐ作業が行われていた可能性が高い。さらに文房具の刀子の出土から、この家の家長は識字層と推定され、堅穴建物の規模からは、この集落の首長層であったと考えられる。

R A 060 堅穴建物（新期）は、廃絶後、時間を置かず埋め戻されている。特に堅穴中央部は、入念な埋め戻しと突き固めが行われ、埋土は版築状になっていることから、埋め戻しには何らかの目的があり、平坦にしたことは明らかである。この堅穴建物の埋土上面からは、8口の柱穴、または柱穴状ピットが掘りこまれている。穴の規模や形状、配置に規則性はなく、掘立柱建物や柱列は見出せない。このことは周辺域の調査結果を待ち、遺構相互の関連性を明らかにしつつ、集落跡全体の中で、検討されるべき課題である。

IV 二又遺跡(第15次調査)

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

遺跡の位置 二又遺跡は、盛岡市街地より南西約4.2kmの下飯岡1・2地割地内に所在する(第21図)。遺跡範囲は南北約250m、東西約300mと推定され、標高は127m前後である。

地形・地質 二又遺跡は、雫石川と北上川の流路変換によって形成された沖積段丘上に立地する(第1図)。雫石川は奥羽山脈から東進し雫石盆地を形成し、北上盆地へ入る直前に盛岡市繁の北ノ浦付近で流路が狭められる(北ノ浦狭窄地)。雫石川はこの狭窄地を抜け北上川と合流するまで、南岸に沖積平野を形成する。雫石川の流路変換は激しく、大きく四回の流路変換があったことが確認され、流路が北へ変化してきたことがわかり、網目状に微高地が形成されている。この微高地上には、二又遺跡など、多くの古代以降の遺跡が立地する。

沖積段丘の基本層序は、上層から表土、シルト、砂礫層だが、地点により層厚は一定しない。

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡 二又遺跡の位置する周辺の網目状に分布する沖積段丘には、農耕を基盤としたと考えられる奈良、平安時代以降の集落遺跡が多く分布する。

縄文～古墳時代 旧河道に面した段丘縁辺部に陥し穴土坑や、縄文時代晩期の遺物包含層が確認される場合



第21図 二又遺跡の位置(1:100,000)

もあるが、稀である。縄文時代晩期の堅穴建物跡は、本宮熊堂B遺跡や台太郎遺跡などで僅かだが確認されている。陥し穴状土坑は、細谷地遺跡や飯岡沢田遺跡において旧河道沿いに並んで確認されている。弥生時代から古墳時代にかけての遺構はほとんど確認されていないが、台太郎遺跡や細谷地遺跡で弥生時代終末期の遺物が出土している。

古 代 7世紀以降、平野の微高地上に堅穴建物を主体とした集落が営まれ始める。竹鼻遺跡では7世紀初頭の集落跡が確認され、この地域の集落の嚆矢と考えられる。政府の統治外にあったこの地の人々は政府から蝦夷と呼ばれた。

8世紀には集落城が拡大し堅穴建物数も増加する。これらの集落は政府文獻記録に登場する志波村の一部と考えられる。その村長や家父長層の墳墓群と考えられる太田蝦夷森古墳群や、市指定史跡高館古墳群などが営まれるのもこの時期である。副葬品に和同開珎や帯金具、勾玉などの玉類、鉄刀や鉄鎌が納められ、村ごとに独立し政府と交易を行い、武力によって地域を統治した部族制社会のリーダーの姿がうかがえる。

9世紀初頭、桓武天皇の命を受けた坂上田村麻呂によって、志波城（803年・市内下太田）が造営され、零石川以南が政府統治下におかれたが、周辺集落様相に大きな変化は見られない。その後、徳政相論を経て、桓武天皇によって軍事と造作が停止され、812年頃には文室綿麻呂によって志波城が徳丹城（812年頃・矢巾町西徳田）へ移された。9世紀半ばまでに徳丹城も廃絶し、軌を一にして集落数が増加する。在地勢力を生かし胆沢城（802年・奥州市水沢区）による統治が進められたためと考えられる。10世紀以降、各地に掘立柱建物や堅穴建物による官衛的拠点集落が出現する（林崎遺跡、大島遺跡等）。

北東北の統治体制が律令政府から安倍氏・清原氏・奥州藤原氏へと移行する11～12世紀の遺構・遺物は多くはない。大宮北遺跡、大宮遺跡で堀を伴う拠点集落が見つかっている。

中世・戦国期 中世・戦国期にかけては、台太郎遺跡や矢盛遺跡などにおいて、堀で囲郭した家族居館が営まれるようになる。城館が各地に営まれ、群雄割拠の時代だったと考えられる。

近世以降 斯波氏を滅ぼし戦国時代を制した南部氏は、盛岡城（市内内丸）を造営した。本遺跡周辺は盛岡藩の飯岡通に区分され、農村地帯が広がった。各遺跡において掘立柱建物跡や水路跡などが散見する。この景色は昭和30年代まで大きく変化することは無かったが、昭和50年代以降、東北縦貫自動車道が開通し、平成以降は本遺跡北西方向において大規模区画整理事業（盛岡南新都市開発）や本遺跡中央を県道（主要地方道盛岡和賀線）バイパスが開通するなど、周辺環境が大きく変化してきた。

2 調査内容

(1) 現況

二又遺跡は、零石川の度重なる流路変換によって形成された沖積平野の段丘上に立地する。水田、畑などの農地が、宅地の周囲を取り囲む農村地帯である。遺跡中央付近を県道13号盛岡和賀線が南北に縦貫する。遺跡北方は大規模土地区画整理が行われ、近隣環境は大きく変化してきている地域である。

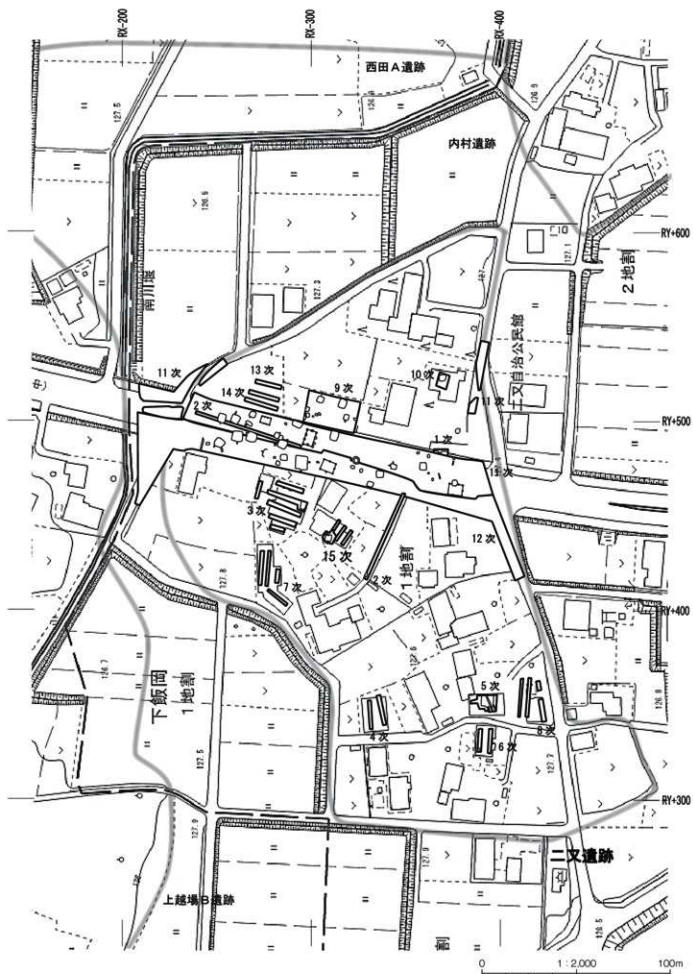
(2) これまでの調査

二又遺跡では、平成8年度以降令和元年度までに15次の調査を実施している（第6表）。公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによる主要地方道盛岡和賀線道路改良計画区域内バイパス建設工事に伴う第11・12次調査以外は、小規模な個人住宅の建替等に伴う調査である。

これまでの調査の結果、本遺跡は9世紀半ば以降から10世紀代にかけての堅穴建物跡を主体とした古代の集落跡と近世以降の集落跡の遺跡であることが分かっている。

次数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期間	検出遺構・遺物	調査主体
1	下飯岡1地割54	個人住宅建築	100	1996.04.03-05.02	平安堅穴建物跡	盛岡市教育委員会
2	下飯岡1地割内	配水管敷設	230	1997.11.17-12.11	平安堅穴建物跡、土坑、溝跡 土師器、須恵器	
3 試掘	下飯岡1地割49-2	個人住宅建築	98	1999.06.11	平安堅穴建物跡（保存措置）	
4 試掘	下飯岡1地割83	農業用小屋建築	49.6	2003.04.07	なし	
5	下飯岡1地割35-1	個人住宅建築	77.5	2003.09.01-09.18	平安堅穴建物跡、溝跡 土師器、須恵器	
6 試掘	下飯岡1地割 21-2.21-6	個人住宅建築	37.5	2004.03.04	平安堅穴建物跡（保存措置）	
7 試掘	下飯岡1地割44	個人住宅建築	116	2004.04.06	平安堅穴建物跡（保存措置）	
8 試掘	下飯岡1地割34	個人住宅建築	118	2009.10.26	平安堅穴建物跡（保存措置）	
9	下飯岡1地割59-9	個人住宅建築	500	2010.05.06-06.10	平安堅穴建物跡、堅穴、土坑 土師器、須恵器	
10	下飯岡1地割55-1	農業用倉庫建築	40	2010.06.04-06.09	平安堅穴建物跡 土師器、須恵器	
11	下飯岡1地割地内	県道道路改良 主要地方道 盛岡和賀線 道路改良工事	3,460	2011.05.06-08.31	縄文土坑、縄文土器 平安堅穴建物跡、掘立柱建物 跡、土坑、土師器、須恵器、 鉄製品、石製品 中世堅穴建物跡 近世以降掘立柱建物跡 陶器、磁器、銭貨、金属製品	岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター 公益財団法人
12				2011.09.16-10.14		
13 試掘	下飯岡1地割 56-12	個人住宅建築	28	2015.05.25	なし	盛岡市 教育委員会
14 試掘	下飯岡1地割 56-13	個人住宅建築	62	2015.05.25	なし	
15	下飯岡1地割51-1	個人住宅建替	36	2019.09.17-09.30	平安堅穴建物跡、土師器、須 恵器、あかやき土器	

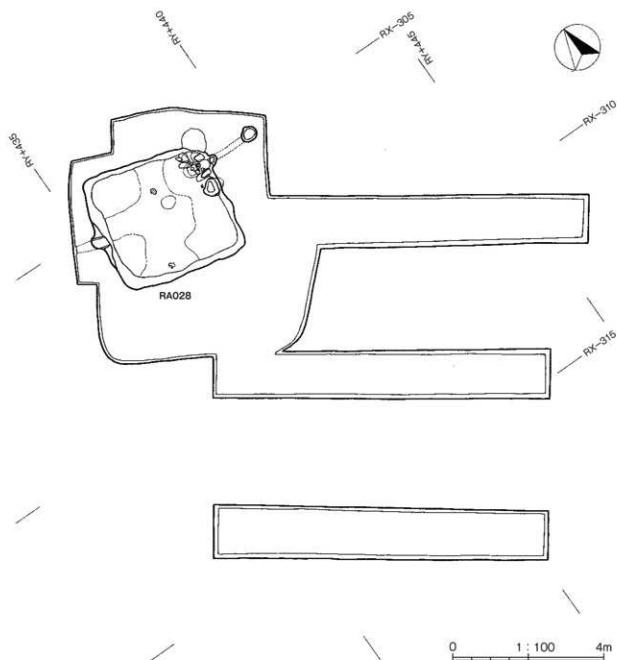
第6表 二又遺跡調査一覧



第22図 二又遺跡全体図

(3) 令和元年度の調査

調査経過 第15次調査区は、遺跡中央部、第12次調査区の西側に位置している（第22図）。周辺調査成果から、古代の遺構の存在が想定されたため、令和元年9月17日にトレンチによる試掘調査を実施した。その結果、調査対象範囲の北西トレンチに竪穴建物1棟を検出した。遺構検出面が住宅建築基礎掘削深度よりも浅く住宅建築により遺構の破壊が免れなかったため、施主、施工業者と協議し、試掘調査から継続して令和元年9月30日まで本調査を実施した。敷地面積921.22㎡、建築面積122.55㎡のうち、44.0㎡をトレンチ試掘調査、竪穴建物を検出した周囲36.4㎡を対象に本発掘調査を実施した（第23図）。検出遺構は平安時代の竪穴建物跡1棟であり、遺構検出面は現地表面から約50cm下の標高127.400m前後の褐色シルト層上面である。



第23図 二又遺跡第15次調査全体図

RA 028 堅穴建物跡 (第 24 図)

平面形	方形	重複関係	なし	主軸方向	E 14° S	堀込面	削平不明
検出面	褐色シルト層上面						
規模	東西 3.5 m, 南北 3.2 m, 検出面からの床の深さ 0.4 ~ 0.48 m						
カマド	(新) 東カマド 方向 E 1° N, 煙道 1.5 m, トンネル状くり抜き式。 火床面から須恵器坏が伏せられて出土。 (旧) 西カマド 方向 W 18° N, 煙道 0.5 m 以上, トンネル状くり抜き式。 火床面や構築土を解体し, 煙道は埋め戻されたと考えられるもの。						
埋土	9層に大別される (第 7 表)。最上層の A 層に十和田 a 火山灰を僅かに含む。						
床面	中央に地床炉と考えられる焼土を検出。カマド右側に貯蔵穴 (P 1)。床面構築あり。中央部から西側中央部にかけて, 固く締まる。						
出土遺物 (第 25 図)	検出面及び埋土中から須恵器坏, 甕, あかやき土器坏, 土師器甕が小破片を含め 75 点ほど出土した。1 は須恵器坏である。東カマド火床面に伏せた状態で出土した。表面に被熱痕跡が見られないこと, 上部にカマド崩壊土が堆積していたことから, カマド廃棄時に置かれたものと推察される。5 はあかやき土器坏である。床面の中央やや北寄りから出土。内面にタール状付着物があり, 内外面に被熱による弾けによると考えられる表面剥離が認められることから, 灯明皿として使われていたものと考えられる。6 は須恵器甕である。口縁部から体部の一部が残存。7, 8 は土師器甕である。外面ヘラケズリ, 内面はヘラナデ調整が施される。						
時期	9 世紀後葉						

(4) 調査のまとめ

今回の調査では, 平安時代の堅穴建物跡 1 棟 (RA028) を検出した。

東西方向に長軸を持つ長方形を呈する。西壁から東壁へカマドを作り替えている。西壁のカマドの煙道は焼土を含む土で埋め戻されており, カマド構築土や火床面, 煙道の焼土痕跡は残っていないことから, カマドは解体され床面をやや掘り下げられたと推察される。規模をやや拡張するとともに, カマドを東壁へ作り替えたと考えられる。

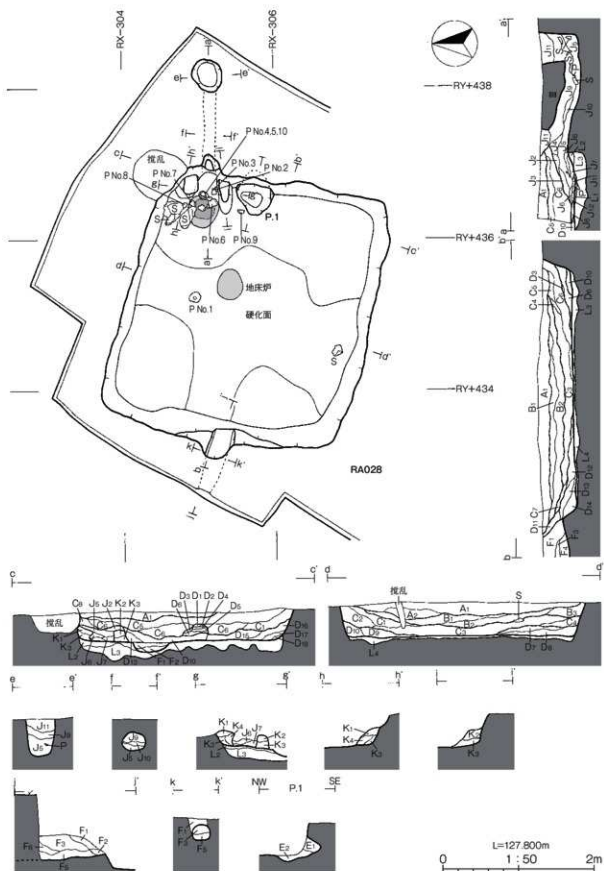
また, 床面からの出土遺物が少ないことや, 東壁カマド火床面から被熱形跡の見えない須恵器坏が伏せ置かれ出土したことから, この堅穴建物を使用していた人は, カマドを納めた儀式を行った上で, 別所へ移転したと推察できる。

RA 028 堅穴建物の規模は約 3.2 m × 3.5 m で床面積は約 11.2 m² を測る。9 世紀後葉の古代新波郡内の堅穴建物跡の面積傾向では小型の部類に属するが, 棟数が多いのもこの規模のものである。

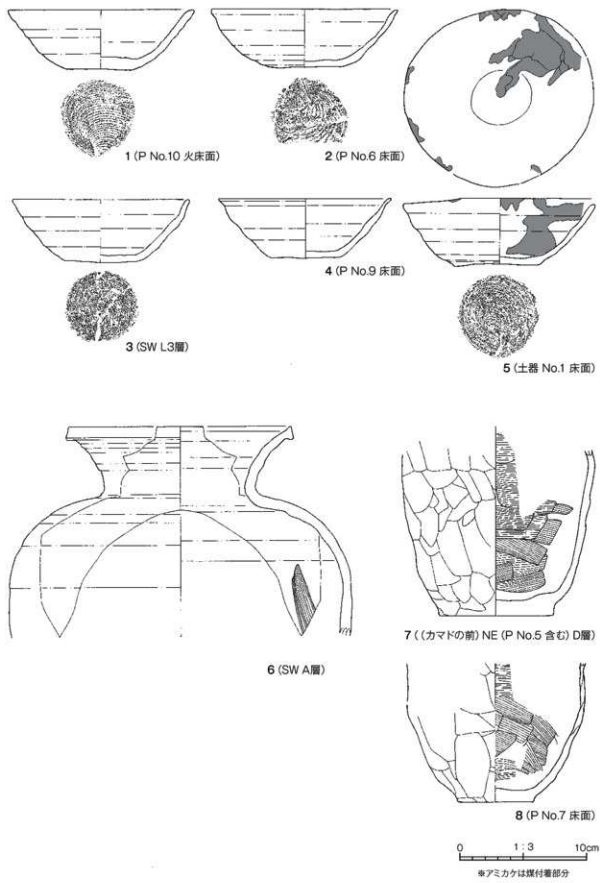
志波城が徳丹城へ移転以後, 胆沢城によって統治された本地域内において, それまで集落が営まれていなかった地域にも農耕を営む集落が出現する。その拡散した集落を構成する建物跡といえる。

(参考文献)

西野修 1998 「北上盆地北部の様相」 第 24 回古代城横官街遺跡検討会資料集 他



第24图 RA028 壁穴建物跡



第25図 RA028竪穴建物跡出土遺物

層名	主要土		含有土				硬状	密度	その他
	土性(略号)	土色(JIS)	土性(略号)	土色(JIS)	状態	%			
A 1	SiCl	10YR2/3.3/3	SiCl	10YR4/4	粉~粒	5	中~硬	中~密	十和田 a 火山灰 (To-a) 粉状に僅かに含む。
A 2	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR3/4	粉	20	中~硬	中~密	
B 1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR2/3	粉~粒	20			
B 2	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉~粒	10	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR2/3	粉	10			
B 3	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	20	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR4/4/6	粉~粒	40			
C 1	SiCl	10YR3/2.3/3	SiCl	10YR4/4/6	粉~粒	30	硬	中~密	
			SiCl	10YR2/2	粉	10			
C 2	SiCl	10YR4/6/4/4	SiCl	10YR3/2	粉~粒	40	硬	密	
			SiCl	10YR2/2	粉~粒	5			
C 3	SiCl	10YR3/2.2/2	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	20	中~硬	中~密	焼土粒僅かに含む。
			SiCl	10YR2/2/1	粉	5			
C 4	SiCl	10YR3/2.2/2	SiCl	10YR4/4/4/6	粉	20	中~硬	中~密	焼土粒僅かに含む。
			SiCl	10YR2/2/1	粉	5			
C 5	SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	40	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR2/2	粉	10			
C 6	SiCl	10YR2/3.2/2	SiCl	10YR3/3	粉	30	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR4/4/4/6	粉	20			
C 7	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3.3/2	粉~粒	30	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR2/1	粉	10			
C 8	SiCl	10YR2/3.3/3	SiCl	10YR4/4/4/6	粉	30	中~硬	中~密	
D 1	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3	粉	10	中~硬	中~密	周境や壁面の崩壊土
D 2	SiCl	10YR3/3.3/2	SiCl	10YR4/4/4/6	粉	5	中~硬	中~密	周境や壁面の崩壊土
D 3	SiCl	10YR3/2	SiCl	10YR4/4/4/6	粉	3	中~硬	中~密	周境や壁面の崩壊土
D 4	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	5	中~硬	中~密	周境や壁面の崩壊土
D 5	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3	粉~粒	10	中~硬	中~密	周境や壁面の崩壊土
D 6	SiCl	10YR3/3.3/2	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	20	中~硬	中~密	周境や壁面の崩壊土
D 7	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3.3/2	粉~粒	20	硬	中~密	
			SiCl	10YR2/1	粒	5			
D 8	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4/4/6	粒・粉・塊	20	中~硬	中~密	暗赤褐色の焼土
			SiCl	10YR2/1	粒	5			
			SiCl	2.5YR3/6	粒	3			
D 9	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3.3/2	粉~粒	30	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR2/1	粒	5			
D 10	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4/4/6	粉	50	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR2/1	粉	3			
D 11	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3.3/2	粉~粒	15	中~硬	中~密	極暗赤褐色の焼土
			SiCl	5YR2/4	粉	30			
			SiCl	5YR4/6	層	1			
D 12	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3.3/2	粉	20	中~硬	中~密	炭粒含む
			SiCl	10YR2/1.2/2	粒	5			
			SiCl	5YR4/6	粒	1			
D 13	SiCl	10YR2/2.2/3	SiCl	10YR4/4/4/6	粒~塊	30	中	中	赤褐色の焼土
D 14	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	10	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR2/1.2/2	粉	5			
D 15	SiCl	10YR2/1.2/2	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~塊	30	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR3/3	粉	10			
D 16	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3.3/2	粉~粒	30	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR2/1	粉	5			
D 17	SiCl	10YR3/3.3/2	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	20	中~硬	中~密	
D 18	SiCl	10YR4/4/4/6	SiCl	10YR3/3.3/2	粉~粒	30	中~硬	中~密	
			SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	10			
			SiCl	10YR2/3.2/2	粉~粒	20			
E 1	SiCl	10YR3/3	SiCl	2.5YR4/6	粒	1	中	中	ビット1層土。炭粒含む。
			SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	20			
			SiCl	10YR2/1	粉~粒	10			
E 2	SiCl	10YR3/3	SiCl	2.5YR4/6	粒	10	中	中	ビット1層土。炭粒含む。
			SiCl	10YR2/1	粉~粒	10			
F 1	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4	粉	50	中~硬	中~密	田カマド埋土
F 2	SiCl	10YR3/3.3/4	SiCl	10YR4/4/4/6	粉	5	中~硬	中~密	田カマド埋土
F 3	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	30	中	中	田カマド埋土
			SiCl	2.5YR3/6	粉	20			
F 4	SiCl	5YR4/6	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	5	硬	密	田カマド埋土
			SiCl	10YR4/4/4/6	粉~粒	5			
F 5	SiCl	10YR2/3	SiCl	5YR4/6	粒	10	中~硬	中~密	田カマド埋土
			SiCl	10YR4/4/4/6	粉~塊	5			
F 6	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4/4/6	粉~塊	5	中	中	田カマド埋土
			SiCl	5YR4/6	粒	1			

第7表 RAO28 竪穴建物跡埋土観察表(1)

解名	主要土		含有土				硬状	密度	その他
	土性(略号)	土色(JIS)	土性(略号)	土色(JIS)	状態	%			
J 1	SiCl	10YR3/3-3/2	SiCl	10YR4/4	粒	1	中～硬	中～密	カマド煙道 赤褐色の焼土
			SiCl	10YR2/1	粉～粒状	1			
J 2	SiCl	10YR2/2-2/3	SiCl	25YR4/6	粒～小塊	1	中～硬	中～密	カマド煙道
			SiCl	10YR3/3	粉	5			
J 3	SiCl	10YR3/3-3/2	SiCl	10YR2/1	粉	5	中～硬	中～密	カマド煙道
			SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒	5			
J 4	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒	20	中～硬	中～密	カマド煙道 赤褐色の焼土
			SiCl	25YR4/6	粉～塊	1			
J 5	SiCl	10YR3/3-2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒	5	中～硬	中～密	カマド煙道 暗赤褐色の焼土
			SiCl	5 Y R 3/6	粒	1			
J 6	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4	粉	20	中	中	カマド煙道 赤褐色の焼土
			SiCl	25YR4/6	粒	10			
J 7	SiCl	10YR3/3-2/3	SiCl	10YR4/4	粉	20	中	中	カマド煙道。炭粒含む 赤褐色の焼土。粉～粒～小塊 白色粘土粒～小塊
			SiCl	25YR4/6	粉～塊	10			
J 8	SiCl	10YR4/6	SiC	10YR8/3	粒～塊	1	中～硬	中～密	カマド煙道 赤褐色の焼土
			SiCl	10YR2/1	粉	5			
J 9	SiCl	10YR2/3	SiCl	5YR4/6	粉	3	中～硬	中～密	カマド煙道
			SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒	10			
J 10	SiCl	10YR2/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉	3	中～硬	中～密	カマド煙道 赤褐色の焼土
			SiCl	5YR4/6	粒～塊	3			
J 11	SiCl	25YR4/6	SiCl	10YR4/4-4/6	粉	5	中～硬	密	カマド火床面
			SiCl	10YR2/1	粉	1			
J 12	SiCl	10YR3/3-4/3	SiCl	5YR3/6	粉	50	中～硬	中～密	カマド火床面
			SiCl	10YR2/1	粉～粒	20			
K 1	SiCl	10YR3/3	SiCl	10YR4/4-4/6	粉	50	硬	中～密	カマドソデ
			SiCl	10YR2/1	粉	1			
K 2	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/3-3/3	粉	30	硬	中～密	カマドソデ
			SiCl	10YR2/1	粉	10			
K 3	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/3	粉	5	硬	中～密	カマドソデ
			SiCl	10YR2/3	粉	20			
K 4	SiCl	5YR4/6	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒	15	硬	中～密	カマドソデ 焼土浸透
			SiCl	25YR4/6	層	50			
L 1	SiCl	5YR3/6	SiCl	10YR4/4-4/6	粉～粒	20	中～硬	密	カマド火床面 浸透層
			SiCl	25YR4/6	層	50			
L 2	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/3-3/2	粉～粒	20	中～硬	中～密	カマド前床面構築土 焼土やや浸透
			SiCl	10YR2/1	粉～粒	5			
L 3	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR3/3-3/2	粉～粒	30	中～硬	中～密	床面構築土 外側
			SiCl	10YR2/2-2/3	粉～粒	5			
L 4	SiCl	10YR4/4-4/6	SiCl	10YR2/2-2/3	粉～粒	5	硬	密	床面構築土 内側

第8表 RA028 竪穴建物跡土観察表(2)

図	番号	写真 図版	台帳 番号	形態		出土		寸法 (cm)					底部 切離	断面調整		備考
				区分	器種	平面 位置	層位	器高	口径	体径	底径	口径/ 器高		外面	内面	
25	1	7	15	須恵器	坏	カマド	火床面	4.7	14.8	-	5.7	3.15	糸切	-	-	床土器 No.10
25	2	7	11	須恵器	坏	床	床面	4.6	14.8	-	5.2	3.22	糸切	-	-	床土器 No.25a
25	3	7	10	あかやき 土器	坏	床	床面	5	14	-	5.5	2.8	糸切	-	-	床土器 No.3、4
25	4	7	14	あかやき 土器	坏	床	床面	4.7	13.8	-	5.4	2.94	糸切	-	-	床土器 No.9
25	5	7	9	あかやき 土器	坏	中央	床面	5.2	15	-	6.7	2.88	糸切	-	-	床土器 No.1。灯明 皿?。外面被熱割 層。内面ターム状煤 付着
25	6	7	67	須恵器	甕	SW	A層	-	17.6	27	-	-	-	-	-	-
25	7	7	33	土師器	甕	NE	D層	-	-	15.2	8.8	-	本業痕 →	ヘラ ケズリ	ヘラナデ	床土器 No.5 ほか
25	8	7	12	土師器	甕	床	床面	-	-	14	6.0 6.5	-	本業痕 →	ヘラ ケズリ	ヘラナデ	床土器 No.7。底部外 面褐色配付着。内面 煤付着

第9表 RA028 竪穴建物跡出土土器観察表

V 安倍館遺跡(第94次調査)

1 遺跡の環境

(1) 遺跡の概要

位置・地質 安倍館遺跡は、盛岡市の中心部から約3.5km北西の安倍館町・上堂1丁目地内に所在する(第26図)。遺跡の範囲は、南北760m・東西380m、標高は138～146m、東を流れる北上川との比高は約20mである。遺跡の立地する厨川地区の大部分は、「滝沢台地」と呼ばれる火山灰砂台地であり、主に岩手山(標高2038m)の火砕流堆積物により形成されている(第1図)。

(2) 歴史的環境

周辺の遺跡 本遺跡の南西には、滝沢台地の縁辺部に沿って東から館坂遺跡・宿田遺跡・前九年遺跡・小屋塚遺跡・大新町遺跡・大館町遺跡といった縄文時代の遺跡が東西に連なっており、縄文時代草創期・早期の土器が多く出土するほか、特に大館町遺跡は縄文時代中期の大規模な拠点集落として県指定史跡となっている。また、これらの遺跡では古代の集落や墓域も確認されている。滝沢台地のさらに南は、雫石川で形成された低位段丘となっており、中世の稲荷町遺跡(堀で区画された独立曲輪の居館)と里館遺跡(東西に7郭が並列する城館)がある。

文献の厨川 平安時代末期、厨川は奥六郡を支配した安倍氏の厨川柵・驅戸柵が置かれたが、前九年合戦の康平5年(1062)に滅亡(『陸奥話記』)。やがて、文治奥州合戦で平泉の藤原氏を破った源頼朝は、文治5年(1189)9月に岩手郡厨川へ立ち寄る(『吾妻鏡』)。この時、甲斐の御家人工藤行光が岩手郡を拝領。その後、工藤氏は岩手郡地頭として下向し厨川館で郡の統治にあたる(『奥南藩徳集』)。鎌倉幕府滅亡後、岩手郡は国人・土豪の割拠する所となり、工藤氏の領地は厨川村のみ



第26図 安倍館遺跡の位置(1:50,000)

に縮小、「厨川氏」と称したという。天正9年(1581)に三戸南郡家の当主となった信直は天正14年～16年(1586～1588)に岩手・志和郡に侵攻、奥州仕置ののち天正20年(1592)工藤氏の「厨川城」は破却された(『開老遺事』)。

城館の遺構 安信館遺跡は、東の北上川に面して、勾当館・外館・北館・本丸・中館・南館・帯曲輪の7郭が連なる岩手郡最大級の中世城館であり、16世紀初頭頃に築城され、天正20年(1591)に破却。『寛文八年奥州岩手郡之内栗谷川古城図』(もりおか歴史文化館所蔵)が残されている。現在、周辺一帯は宅地化し、遺跡の中央には県道220号氏子橋夕顔瀬線(旧国道4号)が南北に通っている。城館の遺構のうち、外館・北館・本丸・中館・南館の5つの曲輪は地形から輪郭をたどることができるが、このうち周囲の堀が良好に残存するのは本丸と北館のみであり、中館の西側の堀や南館の堀、外館の堀はほとんど埋め立てられている。

2 調査内容

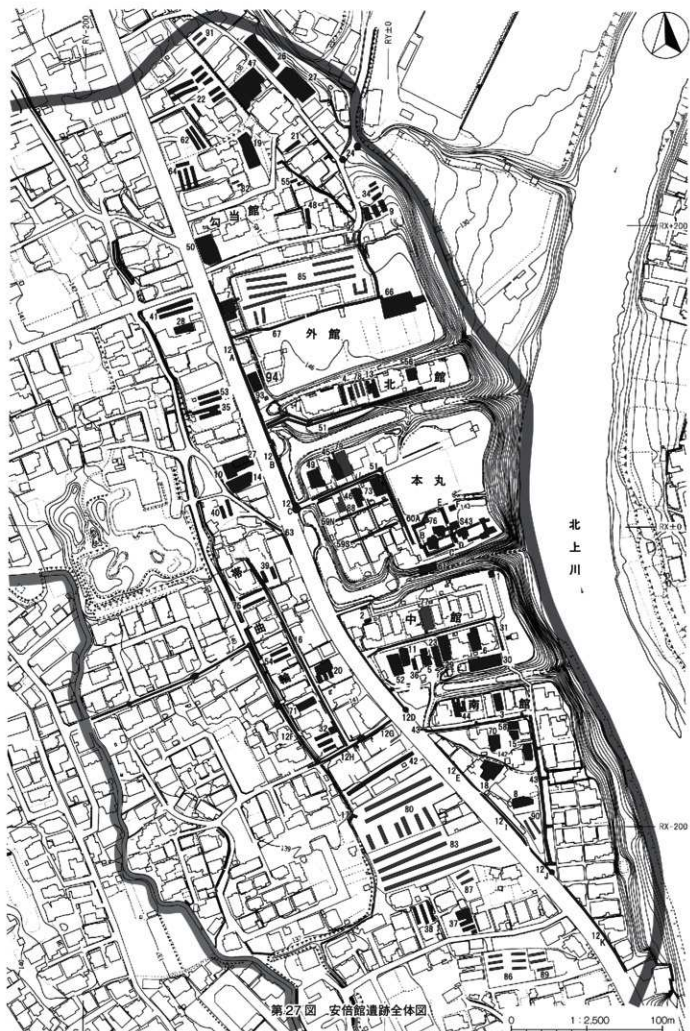
(1) これまでの調査

昭和の調査 安信館遺跡の発掘調査は、昭和43年(1968)に本丸南東部において市立保育園建設に先立ち岩手大学によって実施されたものが最初である。昭和56年度からは盛岡市教育委員会が個人住宅の改築・増築に伴う発掘調査を開始、昭和60年度からは公共下水道建設に伴う発掘調査を実施した。

平成の調査 昭和末期の昭和63年度からは店舗や事務所、アパート建設に伴う発掘調査も実施され、遺跡内の各曲輪から城館に伴う遺構・遺物のみならず、縄文時代早期の遺物包含層、縄文時代中期の土坑、北の続縄文文化の土坑、近世の土坑や溝跡と多岐にわたる遺構・遺物が確認された。平成4年度以降は本丸での住宅建て替えに伴う発掘調査が実施され、本丸が主郭であることが立証された。遺物の年代から本丸の存続期間がほぼ16世紀中であり、安信館遺跡が工藤氏の「厨川城」であることが確実となった(盛岡市教育委員会1999)。平成11～30年度は、各曲輪で住宅建築や宅地造成等に伴う試掘調査が中心となり、中館での住宅建築に伴う本調査(盛岡市教育委員会2001)以外、本丸や堀跡部分では遺構保存措置としている(第10表、第27図)。

枚数	所在地	調査原因	面積(m ²)	期間	出土遺構・遺物
76 試掘	安信館町14-40(本丸南東部)	保育園増築	5	2000.03.03	遺構・遺物なし
77 試掘	安信館町13-5(中館中央部)	個人住宅改築	48	2000.04.10-04.19	中世壱穴建物跡1、土坑3、柱穴11(H12 0階跡跡)
78 試掘	安信館町15-1(北館中央部)	個人住宅改築	51	2000.09.04-09.05	道路状遺構1
79 試掘	安信館町127(本丸北西部)	個人住宅改築	80	2000.11.18-11.27	中世壱穴建物跡2、掘立柱列跡1、溝跡1、土塁跡1【遺構保存】
80 試掘	安信館町207-1 外(帯曲輪南部)	宅地造成	370	2003.08.07-09.29	遺構・遺物なし
(81)	(欠番)	-	-	-	-
82 試掘	上堂1丁目93-4、92-1の一部(勾当館中央部)	個人住宅改築	9	2004.04.19	遺構・遺物なし
83 試掘	安信館町208-1 外(帯曲輪南部)	宅地造成	500	2005.08.09	遺構・遺物なし
(84)	(欠番)	-	-	-	-
85 試掘	安信館町124-1 外(外館北部)	土地売買	406	2007.06.08-06.12	縄文時代早期・後期遺物包含層、中世盛土層、土坑12、溝跡2、柱穴【計西中掘】
86 試掘	安信館町213-3、213-9、213-10(帯曲輪南端)	共同住宅建築	160	2008.03.18-03.19	中世大溝跡1、土坑1【遺構保存】
87 試掘	安信館町211-5 外(帯曲輪南部)	個人住宅建築	40	2008.10.20	遺構・遺物なし
88 試掘	安信館町14-6(本丸西部)	個人住宅建築	33	2009.04.07	中世壱穴建物跡2、柱穴【遺構保存】
89 試掘	安信館町213-1(帯曲輪南端)	共同住宅建築	86	2010.07.01	遺構なし、縄文土器破片
90 試掘	安信館町179-4、183-3(帯曲輪南東部)	個人住宅建築	15	2017.03.17	時期不詳溝跡1
91 試掘	上堂1丁目85-7(勾当館北端部)	個人住宅建築	23	2018.05.17	遺構・遺物なし
92 試掘	安信館町121.1の一部(外館北東部)	個人住宅建築	33	2018.10.09-10.16	中世堀跡1【一部遺構保存】
93 試掘	安信館町124-5(外館南西部)	個人住宅建築	16	2018.10.10	中世堀跡1
94 試掘	安信館町124-5(外館南西部)	個人住宅建築	65	2019.04.15-04.26	中世堀跡1【一部遺構保存】(R1 0階跡跡)

第10表 安信館遺跡調査一覧(平成11年度以降)



第27図 安倍館遺跡全体図

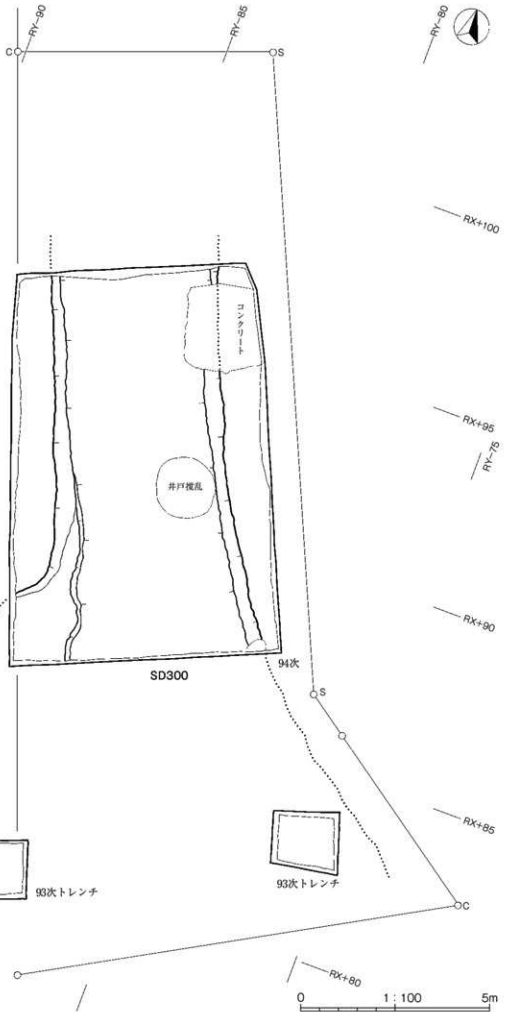
(2) 令和元年度の調査

- 位置** 第94次調査区は、外館南西部の堀跡部分に位置し、昭和59年度に実施された第7次調査区では堀跡（SD300）が確認されており、その南方約50mに位置する。平成30年度の試掘調査（第93次）で堀跡が検出されたため、個人住宅建築範囲のうち基礎工事掘削深が遺構検出面に達する範囲に限定して本調査を行い、それ以外は遺構保存措置とした。南北に長い敷地の西側境界は県道に接し、東側境界はコンクリート擁壁（外館の曲輪平坦部との比高約2.5m）となっている。既存建物があった調査区内はほぼ平坦だが南にわずかに傾斜しており、検出面の標高値は143.200m前後である。
- 基本層序** 調査区内で確認された基本層序はⅠ・Ⅱ層に大別される。Ⅰ層は表土で裸が混じる既存建物解体時の攪乱層。Ⅱ層はスコリアの混じる黄褐色火山灰土（分れ火山灰、地山）であり、その上面が遺構検出面である。
- 検出状況** 重機によりⅠ層を除去したⅡ層上面で遺構検出を行った。検出面までの深さは現地表面から0.3～0.4mであるが、既存建物撤去時の攪乱が多く、調査区北東部にはコンクリート製の小さな地下室の底部が取り残されていた。また、調査区中央付近には井戸掘削の攪乱土が円形に検出され、鉄管が地下より突き出した状態であった。
- 検出遺構** 検出された遺構は、第7次調査区から続くと考えられる中世の堀跡1条（SD300）である。

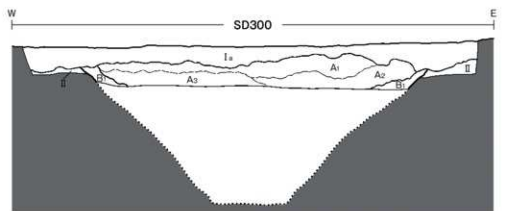
(3) 遺構・遺物

SD300堀跡（第28・29図）

- 位置** 調査区中央をほぼ南北に縦断
- 重複関係** なし
- 規模等** 延長10.3m以上（調査区外）、上端幅4.4～6.6m以上（調査区外）、中端幅3.95～5.2m、検出面からの深さ0.25m以上（第7次調査成果から約2.0mと推定）。北北西から南南東に走る外館西辺の堀跡であり、上端は調査区南端で西に広がり、中端との間に平坦部がある。
- 埋土（第11表）** 自然堆積でA・B層に大別され、A層は3層に細別される。
- A₁層：暗褐色土主体、粉状の黄褐色土が微量混じる。スコリア・炭化物が少し混じる。
 - A₂層：暗褐色土主体、粉～粒状の黄褐色土が微量混じる。スコリア・炭化物が少し混じる。
 - A₃層：暗褐色土主体、粒状の黄褐色土が少し混じる。スコリア・炭化物が少し混じる。
 - B層：にぶい黄褐色土主体、塊状の黄褐色土が混じる。スコリアが多く混じる。
- A層は近世～近現代の最終自然堆積層、B層は堀跡壁面崩壊土層と考えられる。
- 壁の状態** 断面形状は、第7次調査における堀跡A期と同様、上端がより外傾する逆台形と考えられ、壁面は良く整い、極端な凹凸はない。
- 出土遺物** A層より縄文時代土器破片1点・石器2点、近世陶磁器破片1点・古銭1点、近代硬貨1点、近世以降鉄製品破片3点、炭化材が出土している。縄文時代の土器・石器については、東側の外館曲輪平坦面を形成する縄文時代の遺物包含層からの流れ込みと考えられる。



第28図 安倍館遺跡第94次調査全体図



第29図 調査区北壁断面図

層名	主要土		含有土				硬軟	密度	その他
	土色 (JIS)	土性 (略号)	土色 (JIS)	土性 (略号)	状態	%			
A1	10YR3/3 暗褐色	SCL シルト質礫壤土	10YR5/6 黄褐色	SC シルト質壤土	粉	10	硬	密	スコリア・炭化物少し混じる
A2	10YR3/3 暗褐色	SCL シルト質礫壤土	10YR5/6 黄褐色	SC シルト質壤土	粉-粒	20	硬	密	スコリア・炭化物少し混じる
A3	10YR3/3 暗褐色	SCL シルト質礫壤土	10YR5/6 黄褐色	SC シルト質壤土	粒	30	硬	密	スコリア・炭化物少し混じる
B1	10YR4/3 に近い黄褐色	SCL シルト質礫壤土	10YR5/6 黄褐色	SC シルト質壤土	塊	40	硬	密	スコリア多く混じる

第11表 SD300 堀跡埋土観察表

3 調査のまとめ

外館の概要 安倍館遺跡(厨川城跡)の外館は、東西118m・南北76～82mと平面規模では主郭である本丸に匹敵し、城内で最も標高値の高い場所に立地する。しかし、発掘調査ではこれまで曲輪内に目立った建物等はなく、馬つなぎ場か内部の区画施設と考えられる小規模な掘立柱列跡が確認されているのみである。囲郭する堀も本丸等よりも小規模で重複がないことから、本丸や中館などより後に付加された曲輪と考えられている(盛岡市教育委員会1999)。

外館西辺堀 昭和59年度の第7次調査では中世の外館西辺堀跡(SD300A期)が確認され、さらに東側の外館の曲輪面までの土層が良好に残存していた(盛岡市教育委員会1987)。その規模は、上幅7.3m、底幅0.9m、深さは西側の帯曲輪から2.2m、東側の外館から3.3m。断面形状はおおよそ逆台形を呈し、底部付近は箱形に掘りこまれている。また、外館曲輪面西端の地山面は帯曲輪の地山面よりも約0.5m高く、その上にさらに盛土を行ってより高く曲輪面を造成している。

一方、第94次調査で精査した外館西辺堀跡(SD300)の上幅は狭い所で約4.4mであり、また東側の外館との地形が分断されてしまっている。しかし、敷地が現在のような平坦に宅地化された際に本来の堀の上部が削平され、また東側境界にコンクリート擁壁が築かれた際に外館曲輪側面が削られたとみられることから、当該地における中世当時の堀の規模は、第7次調査SD300A期に匹敵するものであった可能性が考えられる。

(引用文献)

- 盛岡市教育委員会 1987 『安倍館・里館遺跡-昭和61年度発掘調査概報-』
 盛岡市教育委員会 1999 『安倍館遺跡-厨川城跡の調査-』(昭和63～平成10年度調査)
 盛岡市教育委員会 2001 『2.安倍館遺跡』[盛岡市内遺跡群-平成12年度発掘調査概報-]

写 真 图 版



大新町遺跡第85次調査区全景（南西から）



調査区北東部分全景（北西から）



RD6662 土坑全景（東から）



調査区東壁基本層序



V b層スコリア粒検出状況土層断面

第2 図版



V c 層 押型文土器出土状況



V b 層 沈線文土器出土状況



調査区全景 (遺物包含層精査前)



遺物包含層出土石器



遺物包含層出土土器



西鹿波遺跡第37次調査区全景（南東から）



RA060 竪穴建物跡全景（東から）

第4 図版



RA060 竪穴建物跡土層断面



カマド（新）全景



RA060 竪穴建物跡北東部遺物出土状況



RA060 竪穴建物跡土器・紡錘車出土状況



RA060 竪穴建物跡出土遺物



RA060 豎穴建物跡出土土器



RA060 豎穴建物跡出土高坏

第6図版



二又遺跡第15次調査区全景（南西から）



RA028 竪穴建物跡全景（西から）



カマド（新）精査状況



調査風景



あかやき土器灯明皿出土状況



あかやき土器灯明皿



RA028 竪穴建物跡出土遺物（須恵器環，あかやき土器環，あかやき土器環）



RA028 竪穴建物跡出土遺物（須恵器甕，土師器甕，土師器甕）



安倍館遺跡第94次調査区全景（北から）



SD300 堀跡全景（南から）



調査風景

附 章

大新町遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定） および炭素・窒素安定同位体分析

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

大新町遺跡は、岩手県盛岡市大新町 17-18（北緯 39° 42' 53.3"、東経 141° 06' 57.7"）に所在し、火山灰砂台地上に立地する。測定対象試料は、縄文時代早期の遺物包含層から出土した土器の外表面から採取した土器付着炭化物 1 点である（表 1）。推定年代は、出土層に含まれる火山噴出物から 8000 年～9000 年前とされている。この試料に対して放射性炭素年代測定と炭素・窒素安定同位体分析および含有量測定を行った。

2 測定の意義

出土土器の年代、炭化物の種類を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、混入物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/ℓ (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001 M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時には「AAA」、1 M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。AAA 処理された試料を 2 つに分け、一方を年代測定用、他方を安定同位体等分析用の試料とする。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 年代測定の測定方法

加速器をベースとした ¹⁴C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 炭素・窒素安定同位体比及び含有量測定試料の化学処理工程と測定方法

- 3 (1)、(2) の処理を行う。
- (3) 試料を EA (元素分析装置) で燃焼し、N₂ と CO₂ を分離・定量する (表 3)。
- (4) 分離した N₂ と CO₂ を、インターフェースを通して質量分析計に導入し、炭素の安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$) と窒素の安定同位体比 ($\delta^{15}\text{N}$) を測定する。

これらの処理、測定には、元素分析計-安定同位体比質量分析計システム (EA-IRMS: Thermo Fisher Scientific 社製 Flash EA1112-DELTA V ADVANTAGE ConFlo IV System) を使用する。 $\delta^{13}\text{C}$ の測定では IAEA の C6 を、 $\delta^{15}\text{N}$ の測定では N1 を標準試料とする。

6 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料 (PDB) からのずれを示した値である。 $\delta^{15}\text{N}$ は、試料窒素の ^{15}N 濃度 ($^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$) を測定し、基準試料 (大気中の窒素ガス) からのずれを示した値である。いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。 $\delta^{13}\text{C}$ は AMS 装置と質量分析計で測定され、AMS 装置による値は表中に (AMS) と注記し (表 1)、質量分析計による値は表中に (MASS) と注記する (表 3)。 $\delta^{15}\text{N}$ は質量分析計による値で、表中に (MASS) と注記する (表 3)。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al 2013) を用い、OxCalv4.3 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

7 測定結果

測定結果を表 1 ~ 3 に示す。

試料の ^{14}C 年代は $8620 \pm 30\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は $9596 \sim 9537\text{cal BP}$ の間に 2 つの範囲で示される。縄文時代早期中葉頃に相当し (小林編 2008、小林 2017)、推定年代におおむね一致する。

次に試料の炭素・窒素安定同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$) と炭素・窒素含有量比 (C/N モル比) について検討する。 $\delta^{13}\text{C}$ は -26.0% 、 $\delta^{15}\text{N}$ は 8.06% で、C/N モル比は、42.3 である。

この結果について、日本列島における食性分析の成果を参照して検討する。今回測定された試料の値を日本列島の生物に関するデータと比較し、横軸に $\delta^{13}\text{C}$ 、縦軸に $\delta^{15}\text{N}$ を取ったグラフ（Yoneda et al. 2004に基づいて作成、図2）と、横軸に $\delta^{13}\text{C}$ 、縦軸にC/Nモル比を取ったグラフ（吉田 2006に基づいて作成、図3）に示した。

図2のグラフによると、今回測定された試料の $\delta^{13}\text{C}$ はC3植物の範囲内、 $\delta^{15}\text{N}$ はC3植物や陸生哺乳類より高く、海生貝類、海生魚類等の範囲に位置する。また、図3のグラフによると、C3植物の堅果類等の範囲に位置する。なお、 $\delta^{13}\text{C}$ がC3植物やそれを食べる草食動物の範囲に含まれるのに対し、 $\delta^{15}\text{N}$ がそれらよりも高い範囲に広がることについては、 $\delta^{15}\text{N}$ が食物連鎖の上位に向かって濃縮されることを踏まえ、陸生の雑食もしくは肉食動物由来の窒素が試料に含まれると見なすことで、ある程度説明が可能である（赤澤ほか 1993、吉田 2006）。

これらの結果より、今回測定された土器付着炭化物のもとになった食物には、C3植物の堅果類等、雑食・肉食の哺乳類が含まれる可能性がある。海生生物が含まれる可能性もあるが、 $\delta^{13}\text{C}$ がそれらの範囲から離れていることから、明確ではない。土器付着炭化物の由来は単一とは限らず、複数の種類の食物等の残滓が含まれる可能性がある。このため、グラフ上に1点として示される各試料の内容も、複数の食物の混合物である可能性を考慮して検討する必要がある。

試料の炭素含有量（表3）は29.3%と、炭化物としてはやや低い値となっているが、年代測定結果にはあまり影響しないと見られる。

文献

- 赤澤威、米田穰、吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析。中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 11 一明科町内一 北村遺跡 本文編（(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14）、長野県教育委員会、(財)長野県埋蔵文化財センター、445-468
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊宏編、新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器、総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション
- 岡木田大、吉田邦夫、辻誠一郎、福田正宏 2010 押出遺跡のクッキー状炭化物と大木式土器の年代、東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要、9、1-14
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
- Yoneda, M. et al. 2004 Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, *Japan, Journal of Archaeological Science*, 31, 97-107
- 吉田邦夫 2006 煮炊きして出来た炭化物の同位体分析、新潟県立歴史博物館研究紀要、7、51-58

表 1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	地理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-192171	試料 1	遺物包含層 Vb 層 深鉢 体部外面	土器付着炭化物	AaA	-24.97 ± 0.30	8,620 ± 30	34.18 ± 0.13

[IAA 登録番号: #A031]

表 2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 14C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-192171	8,620 ± 30	34.18 ± 0.13	8,623 ± 30	9596calBP - 9570calBP (21.6%) 9564calBP - 9537calBP (46.6%)	9662calBP - 9531calBP (95.4%)

[参考値]

表 3 炭素・窒素安定同位体比及び含有量

試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (MASS)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰) (MASS)	C 含有量 (%)	N 含有量 (%)	C/N 重量比	C/N モル比
試料 1	-26.0	8.06	29.3	0.808	36.3	42.3

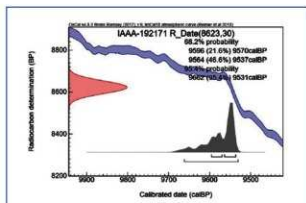


図 1 暦年較正年代グラフ (参考)

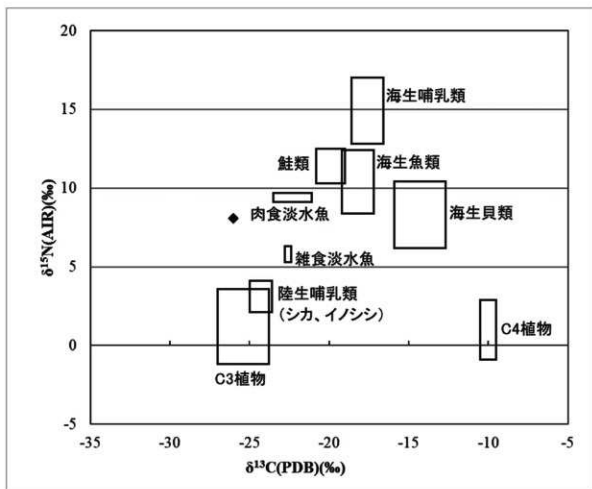


図2 炭素・窒素安定同位体比グラフ (参考)

◆は測定試料。散布図上に表示した枠は、食料資源の同位体比の分布範囲を示す。Yoneda et al. 2004に基づき作成した。

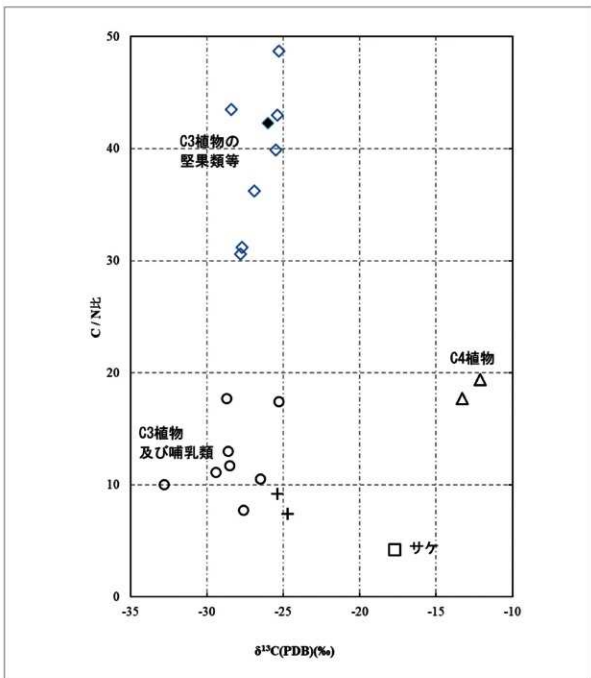


図3 炭素安定同位体比・C/N比グラフ（参考）

グラフのC/N比はモル比。◆は測定試料、その他は現生動物植物の炭化試料。現生動物植物試料のデータは吉田2006による。また吉田2006、國木田ほか2010を参考に食料資源の大別を示した。◇はC3植物の堅果類等、○は堅果類以外のC3植物、+はC3植物を食べる哺乳類、□はサケ、△はC4植物。なお、吉田2006によると、C3植物の堅果類等（測定データはトチ、同（木灰）、ミズナラ、ドングリ、同（粉）、カチグリ、ヤマユリ、ジャガイモ、以下他の食料資源も同様に示す）のC/N比は30～50、他のC3植物（エゴマ、アズキ、サトイモ、ヤマイモ、ナガイモ、ノビル、ママシグサ、クワイ）及び哺乳類（タヌキ、クマ）は7～20、C4植物（アワ）も堅果類以外のC3植物と同程度とされる。また、サケは海産魚類の範囲に属するものとして示されている。

報告書抄録

ふりがな	もりおかしないいせきぐん							
書名	盛岡市内遺跡群							
副書名	令和元年度発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ番号								
編著者名	鈴木俊輝, 津嶋知弘, 今野公顕, 室野秀文							
編集機関	盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館							
所在地	〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1 電話 019-635-6600 Fax 019-635-6605							
発行機関	盛岡市教育委員会							
発行年月日	2022年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大新町遺跡	岩手県盛岡市 大新町 17-18	03201	LE06-1075	39° 42' 55"	141° 06' 58"	2019.04.15 ～ 2019.06.05	87	個人住宅建築
西鹿波遺跡	岩手県盛岡市 三本柳 2 地割 37-9		LE27-1046	39° 39' 55"	141° 09' 50"	2019.05.31 ～ 2019.07.02	66	
二又遺跡	岩手県盛岡市 下飯岡 1 地割 51-1		LE26-0024	39° 40' 30"	141° 06' 53"	2019.09.17 ～ 2019.09.30	36	
安倍館遺跡	岩手県盛岡市 安倍館 町 124-5		LE06-1123	39° 43' 12"	141° 07' 32"	2019.04.15 ～ 2019.04.26	65	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
大新町遺跡 第 85 次	集落	縄文時代	土 坑 1 基 ピ ッ ト 2 口 遺 物 包 含 層		縄文土器, 石器			
西鹿波遺跡 第 37 次	集落	奈良時代 古代以降	竪 穴 建 物 跡 1 棟 土 坑 6 基 ピ ッ ト 9 口		土師器, 土製品, 石 器, 石製品			
二又遺跡 第 15 次	集落	平安時代	竪 穴 建 物 跡 1 棟		須恵器, あかやき土 器, 土師器			
安倍館遺跡 第 94 次	城館	中 世	堀 跡 1 条					

盛岡市内遺跡群

—令和元年度発掘調査報告書—

2022年1月31日 発行

- 編 集 盛岡市教育委員会 盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL 019-635-6600 FAX 019-635-6605
- 発 行 盛岡市教育委員会
- 印 刷 杜陵高速印刷株式会社
〒020-0811 岩手県盛岡市川目町23番2号
TEL 019-651-2110 FAX 019-654-1084